

川柳の証

麻生路郎★主宰



大正十三年三月三日第三種郵便物
昭和十六年六月一日發行 第十八卷第六號

號 月 六

Pensoj flugas trans la land-limon

川柳雜誌

六月の句會

★六月七日(土)午後六時

★御津八幡宮(電話南八六四)

南區八幡町佐野屋橋筋角

(本綿橋電停下車東一丁
八幡町市バス停西一丁)

兼題「脍炙り」麻生路郎選

「トリック」須崎豆秋選

柳話「題未定」麻生路郎

會費三〇錢

呈賞 席題天位(各題)に粗品を贈る

主催 川柳雜誌社

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地

電話上花堀 三三三三番
八八一六番
八八一四番

(本社の句會は毎月第一土曜)

戸田孤蓬 題字・京大教授 本庄榮治郎博士

川柳 二千六百年史

★本誌十七卷一月號より七月號まで連載好評を博し
た川柳二千六百年史に、大増補して上梓!

序・麻生路郎
跋・宮本又次
送料 九拾錢
定料 六錢

麻生路郎著 柴谷柴舟畫

★特價 八十錢(送料) 九錢

川柳と 累卵の遊び

敬神 崇祖

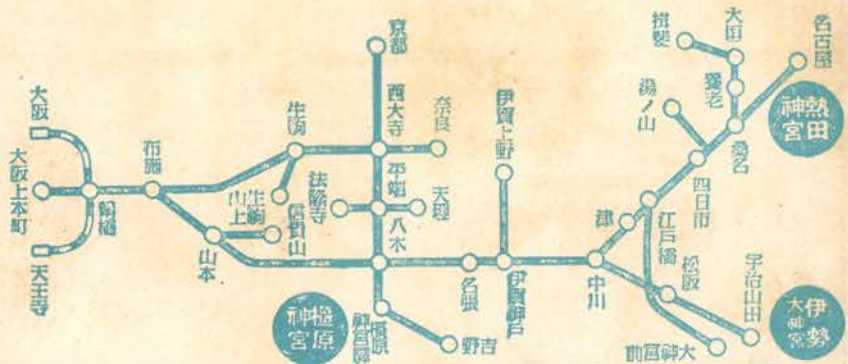
伊勢大神宮、熱田神宮、檀原神宮、神武天皇御陵をはじめ奉り数多くの御陵墓、枚岡神社、奈良春日神社、石上神宮、大和神社、大神神社、吉野神宮、丹生川上神社(上中下社)、談山神社等の官幣社ほか御由緒深き神社への光榮ある参拜路であります

心身 鍊成

神武天皇大和御平定の聖蹟をはじめ、飛鳥奈良朝時代の文化を物語る遺蹟下りでは吉野朝院多識の史蹟、奈良、吉野、多武峯、聖生寺、赤目四十八關、香落後、養老等の名勝に一般回遊線道としてのハイキングコースがあります

重要 交通路

大軌と参急電鐵とが合併して全營業路線は四三八軒、これに直營バス及傍系の電車バスを加ふる時は一千軒を超え、大阪奈良三重愛知岐阜の一府四縣に跨り交通産業に緊密な關係を有する重要な任務を擔うてゐます



関西急行鐵道

(旧名 大軌・参急鐵道)

藤村誠一著

序 麻生路郎
百田宗治郎
跋 吉川則比古
裝幀 田村孝之介

隨想集 詩人複眼

定價壹圓 (送料六錢)

★高鷲亞鈍が著者のペンネームだと云へば本誌讀者にはこの本が持つ魅力を想像することが出来やう。

發行所

不

朽

洞

振替大阪三〇三九二番

輕文學に終る勿れ

麻生路郎

私が川柳に手を染めてから、既に三十八年にもなるが私の川柳は私の思ふほど進境を示してくれない。私の愛好する川柳の世界は私の思ふほど眼を開いてはくれぬ。私は日夜この事について懊惱を續けてゐる。今日ほど地方文化が叫ばれてゐる時代に、地方文化の根幹をなさねばならぬ川柳に對して、識者がこれを取り上げることの等閑であること、川柳人自體ですら認識不足の甚しきを思ふ時、これが貫徹を期してゐる私は自己の微力を慨嘆せずにはゐられない。私はかかる時、糞蟲(スカラベサクレ)の研究に其の生涯をささげた世界的博物學者アンリー・ファブルを想ひ、經濟學の始祖アダム・スミスが著作に對する努力を想ひ、

國を逐はれても、なほ資本論の著述を死の直前まで執筆し續けたマルクスの偉大な精力を想はずにはゐられない。

世間では川柳を市井の一文藝に過ぎないと見てこれが研究を忽諸に附してゐるが、私自身は川柳を、しかく輕文學視してはゐない。

川柳を深く研究するに従つて、そは人間陶冶の詩であることに想倒しなればならないのであるが、世人の多くは、これが研究を怠り、單なる讀破により皮相の觀察をなし、遂に門外漢たるに過ぎざるは甚だ遺憾である。

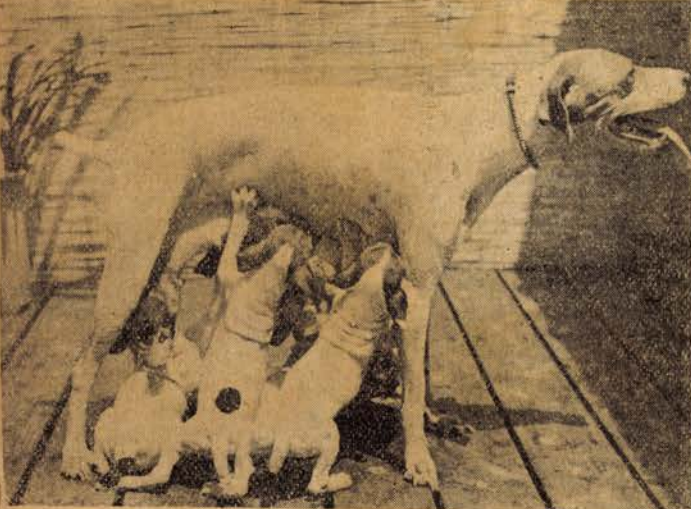
しかしながら、世人の認識不足を責むるに先だつて先づ川柳人自らの微力を想ひ、只管研鑽に邁進すべきではなからうか。

川柳が明治に復興して

既に四十年に近い。しかもこれが眞髓を説く一書すらなく、僅に數冊の古句研究書貧弱なると句集と隔靴搔痒の入門書があるに過ぎない状態である。斯界の進展の遅々たるも宜べなりと云はざるを得ない。

靜に私は思ふ。今にして川柳人が川柳を再檢討し、眞にその價值に傾倒し、地方文化の根幹として人間陶冶の大使命を果たさなければ、川柳は永久に市井の輕文學に終るであらうと。

柳誌統合問題が各地に頻發する時に際し、川柳人は政治的紛争を拂拭し、これが内容的進展に一層の努力を拂ふべきではなからうか。切に自省を望む。

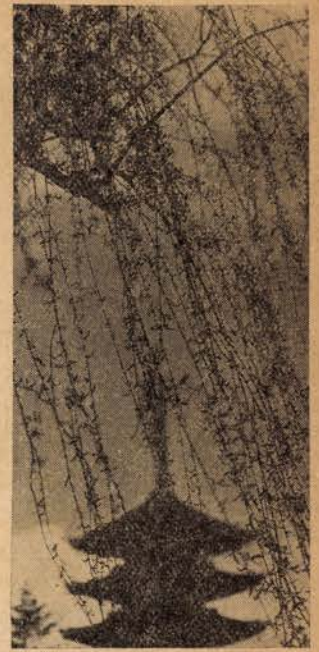


水ぼうだといふ犬の子思ひ(歩八)

カメラ 福井 哲

川柳雜誌 六月號目次

表紙……(鮎狩)	福井 哲
川柳寫眞	八 步・哲
輕文學に終る勿れ	麻生路郎……(一)
隨想文字のいたづら	小山文三……(五)
評川柳一ト筋	道乃・丹路・鮎狩・栗人 紫香・瀧花・西錦
松岡外相と川柳	福田山雨樓……(六)
武玉川四篇研究(九)	梅本座山 森東魚 蛭子省二……(一〇)
徐州の思ひ出	大森風來子……(三)
箒と鹽に就て	石曾根民郎……(三)
吟行地	藤生路郎……(二)
調べ	高橋かはる……(五)
街に住めば	鈴木九坡……(五)
蘆屋句筵	藤生霞乃……(九)
川 世界・史(四)	戸田孤鋒……(四)
北京の兩東魚	古川風竹……(四)
小さなバラッド	藤生アイト……(三)
蕎麥・酒	蛭子省二……(七)
お蘭組のための脚本	
劇 是るかなる健康(一場)	小畑自由朗……(三)
★	
近作 柳 柳	麻生路郎選……(三)
川 柳 塔	麻生路郎選……(六)
同 舟 近 詠	諸 家……(二六)
代 用 食 綿	福田山雨樓選 姫田夕鐘選……(二六)
集 純 綿	高須嘯三味選……(三三)
各地 柳 壇	
川 柳 協(三〇)	柳 界 展 望……(三)
川 柳 書 架(六)	後 記……(三二)
社關係の人々……(三六)	



吟行地
調べ
奈良篇
(四)

麻生路郎

(19) 三笠山

★三笠山は春日神社の背後にある山で、御蓋山とも蓋山とも書く。又本宮嶽とも浮雲峯とも呼んでゐる。麓に茶店があつて、鹿が遊んでゐる全山芝生の山はあれは三笠山ではなくて若草山である。山頂までが三重になつてゐるので旅の人のひとり合點から三笠山と思ひ込み、間違つて云ひもし書きもしたのであらう。いつ頃から間違つたものか知らないが私たちの學童の頃には既に若草山のことを三笠山と云つてゐた。案内記など

は、唐紙へにもじむ三笠の月の歌

たまま書いてゐる。

★三笠山の山頂には春日祭神が最初に鎮座された本宮神社があり、山麓には春日・若宮・奥の院(紀伊神社)があり、その他末社が多くある。外に蝙蝠窟・月日磐・氷室の舊蹟などもこの山麓にある。

★この山は春日神社の境内林で老樹名木で知られてゐる。春日大杉(周囲三十尺)・七本杉・三本杉・イブキ・竹・柏・純林などがそれである。殊に藤は林中到るところに、怪蛇のやうに蔓延してゐる。

★三笠山に因んだ古川柳では、

月の歌ばかり歸朝と奏聞し
平仄の中て手調渡の月をよ
み
その山に豚も居るか阿部
にきき
仲麻呂の相説相手月ばかり
百人の中て唐紙へ一首かき
唐までも知れた富士と三
笠山
などがある。何れも阿部仲麻呂を詠んだ句で、百人一首の「三笠の山に出でし月かも」の故事から一步も出て居ない。

★仲麻呂は靈龜二年、彼が十六歳の時、選まれて遣唐使となつた。唐では博識の譽れが高く、名も朝衡と改めて秘書監・衛尉卿を兼ねて居た。勝寶年中、遣唐使の藤原清河が歸朝する際、共に歸ることを願つたので、玄宗皇帝始め人々が詩を賦して彼に贈つた。

そして明州では唐人が彼のため別れの宴を開いてくれた。彼はそこで海上の月を望んで悵然とし「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」の和歌を詠じ、これを漢譯して示したところが皆感嘆した。ところが海上で風に遭ひ安南に漂着したので、その後又唐に戻つた。そして肅宗に擢んでられ御史中丞・北海郡開國公を兼ねしめられ三千邑を食んだが寶龜元年正月七十歳で唐土で死んだ。月の歌ばかり歸朝した譯である。

★ほんとの三笠山を句にすることは難しい。

三笠山隣の山に名を奪られ
出でし月かも今夜は奈良
泊り

(20) 奈良の藤

★天空に高く咲き誇る藤は春日の林中到るところに、怪蛇の如く蔓延してゐる。この藤は春日神社の御紋章が垂藤であるに見ても、又奈良朝時代の古歌から窺つても、藤原氏に因縁の深い名木で、日本の藤の名所でもある。中でも若宮御本殿前の八ツ房藤は有名である。

★特に奈良の藤を句にすることは難しい。

奈良の藤だらりの帯とくらべたし
奈良の藤櫻へ人氣取られたり
逢見が大蛇のやうな藤におち
藤原氏藤に名残りをもどめたり
八ツ房藤集印帳に見上げられ

同 路郎 同

(21) 若草山

★若草山は春日山の北にあつて全山が美しい芝生で覆はれ、女性的な優しい感じのする山である。この山を間違つて三笠山と稱んでゐるが前述のやうに三笠山は春日神社の背後にある山である。しかし、奈良に遊んだ人の多くはこの若草山の三重目、鶯塚といふ古墳のあるところに登つて奈良市内は云ふまでもなく、大和平野の一部、遠くは山城、和歌山、伊勢方面の眺望をほしいままにするばかりでなく、こゝで地圖を擴げて昔の奈良の都の所在地を知ることが出来るのである。

右の方即ち北の山に沿うて、東西に一線を劃する道路が昔の一線通りで、奈良市の西端に煙りの見えるのが停車場、その右側に東西に走つてゐる道路が昔の三條通りで今でも三條通と稱んでゐる。この一線通りと三條通の間を斜に一線見えるのが大阪奈良間の電車、その中間のところに森がある。その森の西側に他と色の變つた一劃がある。これが昔の平城宮址で、電車の停つてゐるところが東大寺に對する西大寺、正面に高く見えるのが生駒山、その左に續くのが信貴山・二上・葛城・金剛の諸山である。

西大寺の線を左に見廻はす

と郡山町で、その手前に九條がある。一條通りの中程の一部落が法華寺村(今は奈良市)これと對照の南の一部落が大安寺村である。昔の奈良は東大寺・西大寺・法華寺・大安寺を四本柱とし、平城の宮を中心に展開されてゐたのである。

★若草山を詠んだ
甘く見た若草山に息が切

生々庵

の句はうまい句だ。青々とした芝生の山であるから何んの苦もなく登れそうなので、誰でも走つて登るが、しかし見縊びつたほど樂々とは登れない。三重目のところで山の高さは三四一米もあるのである。

★この山の山焼は春日神社おん祭と共に南部の代表的な行事で、毎年二月十一日の晴天に芝焼をする。奈良市の消防手全部が集つて夕方六時から山麓の四周から一時に點火する。そして山頂へ山頂へと燃へ擴がり全山が焰と化したその光景は、とても外では見られない奇觀である。しかもこの行事を一層華やかにするため、焰の中に五彩の虹を描く仕掛け火や南都美妓連の踊り等の餘興が行はれてゐたが、事變この方それ等の餘興

は中止され單なる芝焼きの行事となつたがその壯觀には變りはない。

★この行事の起因は昔興福寺と東大寺が若草山の境界争ひをやつて永い間の訴訟の果、南都五大寺預りといふことになり、双方立會の上これを焼拂つて和解したのが始まりだと傳へられ、荒法師華やかなりし時代の遺物らしい。

★山焼の句。

佐職の閑然だつた山の火
よ アート

山焼のあとを佐職さびし
見 蔑乃

(22) 松花堂の遺跡

★關急奈良終點の辻北へ半丁西側(奈良市中筋町三十五番地)に書畫茶道で知られた松花堂の誕生した遺跡がある。この舊宅趾には翁が書畫茶水に愛用した清水の湧井戸が今なほ現存してゐる。

★松花堂は天正十七年の生れで幼少の頃から書を嗜み従一位太政大臣近衛前久公(龍山)に教へをうけ二十歳にして剃髮、山城男山瀧本坊に入り、阿闍梨實乘律師に瑜珈を學び、同坊の二世となつて昭乘阿闍梨と名乗つたが俗姓は中沼、幼名を展助と呼び後に式部と稱し之た。

★阿闍梨の能筆は天下に知られてゐた。時の將軍家光がその書を見やうと思つて揮毫を所望したところが、阿闍梨は將軍の面前で料紙を展べ、さて筆を執つて墨をふくませたが、た

の水を硯に用ひ、阿闍梨をよんで再度揮毫を命じた。ところが阿闍梨は筆をとつて「これは不思議、硯水の軽いこと柳の水に變りがござりませぬ」と云ひながら、さら

ちまち苦り切つた顔をして「この硯の水は硬くて不可ませぬ。自分は常に京の「柳の水」といふ名水を用ひてゐる」と云つて筆を措いてしまつた。いざ揮毫といふ段に水が硬いと云ふ理由で書かないので一座は興をさまし、その日はそのままに過ぎたが將軍は阿闍梨のいつたことを一つ試して見やうと、早速京都から「柳の水」を取り寄せ、ひそかにそ

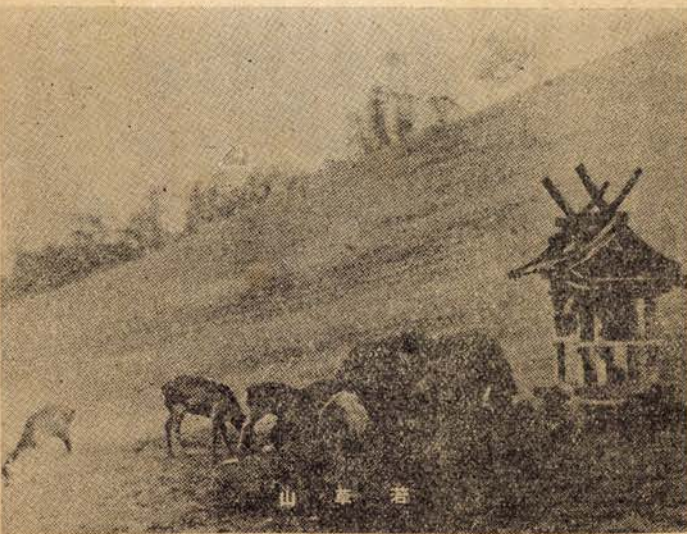
／＼と大揮毫をしたので、將軍をはじめ、家臣一同も、その神技に感じ入つたといふ話がある。

阿闍梨は天性慈愛に富んでゐたので、書齋の窓外にある樹枝には何時も小鳥が嬉々として群れ飛んで阿闍梨を慕つてゐるやうであつたと云はれてゐる。又護摩堂に坐して誦哭してゐると、その聲をたよりに一定の老狸が庫裡の竹簾から這ひ出て阿闍梨の座の近くへ狎れ／＼しくやつて來るので阿闍梨は「行法の障りとなるから早く歸れ、いたづらな小僧に見つかつたら捕へられるぞ」と云ひ聞かせると、さもうれしげにク、と鳴き尾を振つて竹簾へ歸へるのを常としてゐた。ある時は廊下に現はれ、用便に出た阿闍梨の裾に纏ひつくさまがいかに懐しげであるので、その都度小僧に知れぬやうに餅を喰べさせてゐたといふ話である。

★阿闍梨は五十六で寺職を退き坊の南丘に小宇を設け風月を友としたが寛永十六年九月十八日に五十八歳で沒した。

★松花堂を詠んだ古句があらうとも思へぬので探がさなかつた。

松花堂裡に揮毫のぞかれ
路 郎
自畫像へ一首うかんだ松
花堂 同
松花堂へあゝ江戸の水京
の水 同



柳川 世界史 Ⅲ



戸田 孤 蓬

(三) ギリシヤ史

トロイ

ホーマーのイリヤッド・オデッセイの大詩篇にうたはれたトロイ戦争が歴史上の事實であることが分り出したのは極く近年の事である。

シリヤの文明は西漸して地中海のクリート島へヘレニズム文化の黎明をもたらす。これがギリシヤに再轉するのだがその媒介をしたのが小アジアに位置するトロイだ。

ギリシヤ神話の神々が後世不和のリンパ(Apple of dis-

オリンピツク

五輪旗なんか古代のオリンピツクにはなかつた。併し五大洲の民族がみんなちがつてゐた如くギリシヤは統一國家といふ事が出来ない程小邦分立の都市國家群であつた。それが共同の神話と傳説を持つてゐる爲めに年一度デルフイの神殿に集つてお祭を行ひ各國の若者達が競技をやりつゝ親睦をはかつた。さればこそ犬猿の間柄にあるものゝペルシヤ戦争の如き外敵の侵入にあつては見事なデイム、ウワークを行ふ事が出来た。

オリンピツク餘興にしては大きすぎ
オリンピツクすめば敵です
味方です
オリンピツク一寸とスパイ
もしてかへり

スパルタ

ギリシヤの南端ペロポネッス半島に國をなすものはスパルタである。スパルタ教育の言葉が全てをあらはす様に質實剛健の標本みたいな尙武國であつた。

スパルタの楯は戸板につかはれる
スパルタ少年斷食比べなど
をする

アテネ

コリント地峡をへだてゝ北

にアテネがある。スパルタが野人ならばアテネは名實ともにヘレニズム文化を享受した文化人であつた。エーゲ海は蒼緑にオリブの花咲くバレテノンのあたりすでは西洋文明が形而下形而上の基礎工事を着々行つてゐた。後にペロポネッス戦争と云ふ長期戦をスパルタの間におつはじめて共倒れとなる。

女みなアフロジツトの顔で
ある
圓柱の影でオメガの戀をする

ペルシヤ戦役

エーゲ海をへだて、小アジアの沿岸は全てペルシヤ領である。集權國家の強大が自由主義的な對岸へ觸手を伸ばす。海洋國家としてのアテネの海軍、スパルタを中心とする勇敢な陸軍は數回にわたつて繰返へされた來寇をしりぞけて遂に敵の野望を放棄せしめた。マラソン競争の起源であるマラソンの勝利、スパルタ王リオンダスの壯絶なテルモビレーの死の防衛、世界最初的大海戦であつたサラミスの榮譽など挿話はつきない。

マラソンの勝利聴き手も死にそうだ

防壁を俺の屍でこしらへろ
サラミスの魚はペルシヤ臭

北京の兩東魚

古川 風竹

古句研究家の森東魚さんが昨年北京に轉任したので、北支には東魚を名乗る柳人が二人となつた。私は森さんよりも燕京に古い増田さんを紹介したい。

拙著川柳忠臣蔵が取持つた不思議な縁で私は八千キロを距てて増田東魚氏と柳交を結んでゐる。つい去年の師走頃からである。

私は増田氏に川雜を贈りそして森東魚さんと會ふ機会を推奨した。それに對し増田氏より最近こんな返事が來た。

「實は小生當地の東亞新報に時にふれ投句致しますが、森東魚さんの名も拜見しては同名の柳士もあるものかな、事に依れば抗議と改名を申込みと思つて居た處でした。奇しき御紹介に依り、ぜひお會ひ致します。小生は追分ぞ知られる北海道歌集生れで代々鱈漁を業とし東魚と名附けた譯です」云々とある。

多分、兩東魚はもう飯館でも會つて柳談を交へたであらう。

くなり

ソクラテス

人間が物を考へる最初が哲學することであり最後も亦哲學することである。宇宙生成を外的なものによらず内的なもので説明を試みたのがソクラテス。「汝自身を知れ」には實行力を伴ひ理論家のギリシヤ青年達を手こずらせた事だらう。最後は國法を重じて冤罪と知りつゝ毒盃をあほぐ。

「我」と云ふ字に押しだまり又だまり
國法が罪があらうがなからうが

「我」と云ふ字に押しだまり又だまり
國法が罪があらうがなからうが

プラトン

社會秩序を自然のおもむくまゝに置く時は自由主義が調

戦線の將士へ
白衣の勇士へ

慰問品を



慰問品賣場 一階



實用百貨店
松坂屋
大阪・日本橋

節し人間の頭で組立た時全體主義社會の綱領となる。プラトンの國家論は政體の循環説を解き爲政者たるものは金の性質を有するものでなければならぬと云ふ。

ユートピアのまゝて讀まれる國家論
プラトンは社會の圓周卒にふれ

アリストテレス

今さら科學する心でもあるまい。農、工、理醫、經濟その他百般の自然科學社會科學の源を作り丁寧に科學する方法を教へたのがアリストテレスである。一度アレキサンドル大王の師となつては征覇の片棒をかつぎその理想の一端

を實驗もし實現もした。

科學史のこゝにもアリストテレスの名

アレキサンドル大王

ギリシヤ史も末期に至るとその覇權は北方のマケドニアにうつる。歴山王が父のあとを繼ぐ頃東方へ過去の復讐を試みる程の實力がついてゐた。その遠征軍はヘレスポンドの水を渡つて小アジアへ、そして殘敵を掃討しつゝシリヤからペルシヤの本土へ荒野の月に歳月は経過して遂に馬蹄に双向ふものなく遠くインダスの流へ進撃する。大王の名に恥じずアレキサンドルは苦心に苦心を重ねた事は言ふまでもない。

今さら科學する心でもあるまい。農、工、理醫、經濟その他百般の自然科學社會科學の源を作り丁寧に科學する方法を教へたのがアリストテレスである。一度アレキサンドル大王の師となつては征覇の片棒をかつぎその理想の一端

もない。しかし彼はその大範士を永遠に握る事もし能す



雄途半ばにしてパビロンに若く死んだが、東西文化と東西民族の血を交流せしめた事に於て文化史はその功績をみとめる。

大王の命令「前へ進め」だ
受け
妥協には俺の劍が承知せぬ
そ
一流生光底タリウス王は逃げ
天命の外は百戦百勝す
大図はアリストテレスにも及び

う。

増田氏は北海生れの江戸育ち、それも本所松坂町である。それがため義士研究も相當のものらしく、「この幕は東西相通じて義士川柳の進展に一肌ぬぎたい」と手紙の一節にある。氏が今年年賀狀代りに知友に送つた義士四十七句には名吟が多い。

右の手紙の中に「夏の北京」と通り左の五句があつた。
仲鷹も北京のほこり歌に出ず
唐の月三笠山に大き過ぎ
没法子胡同で豚に行きあた
支那家屋疊敷したと妻に書き
風を切る夜の洋車の裸かな
氏は川柳、俳句、短歌の外漢詩もよくするらしい。故郷に因み桑山と號してゐる。

川柳塔



—路郎選—

軸替へて手紙を書いて今日も暮れ

大阪府
高石町

米本貴志子

特免の札がお客の氣をそゝり
縁談へ無口ながらもキツト立ち
イギリスは味方計りを背負投げ

大阪
橋本緑雨

僕だけにしやべらして皆だまり
防空池ボーフラと蛙とがあるよ
疑へば一人の眞人間があるない
乳母車姉の子だと押して行く

大阪
高橋かほる

兵隊さんの寫眞が殖えた寫眞帖
カルピスを飲み編纂を引受ける
女學校の制服仲々出来てこず
櫻草市場の釣銭で買うて去に

横濱
福田山雨樓

感慨は送別會で酔ひつづれ
外語出身のH氏都落ち

辨當持參

童心に似て辨當の胡麻うれし

鐵道奉公會の世話役仰付かる

世話役の辭令貰つて身がしまり

屋島にて

屋島寺晝寢でもして見たいなり

高知桂の演にて(坂本龍馬の銅像)

銅像は遙か東都を望んでた

兵庫縣
奥村丹路

わかるかい酔はぬ程度の酒の味

なるべくは靜に泣けよ春の女

席ゆづるまでもなくあゝ割込まれ

臺所もとより僕の關知せず

或る人に

別れ來て車窓寄り添ふ人もなし

空閑地利用にもまた貧富の差

プラツトフォーム舞臺に立つた氣で歩き

張家口
岩崎柳路

牡丹をつかむ様な夢の乳房よ

戀と言ふ柄にはあらず髯を剃り

萬年筆のインクこぼした契約書

原稿紙シャープの蕊が折れた音

大阪
大西八歩

郷土出身西尾將軍凱旋す

伊勢の旅朝日の煙へ記者がくる

萬引の眼も純綿を探すなり

奢侈品も乗せて週末列車來る

片山津溫泉にて

對岸へまでインフレの灯がゆれる

陸軍療養所にて

松風に心をいやす松葉杖
一現の客へ氣まづい給仕盆

弟の死

行年二十七とは若き佛さま
子の頭勝手な時に來てさすり

ハワイ 高澤 一浪

他人のことだから色魔と言ひ切るよ

戀強し親でも子でもありません

呼びすてる日は近づけり宵寝する

金曰ク人間なんて甘いもん

忘れてと女は肚を明したり

大阪 戸田 孤篷

にはとりが荷物の様に運ばれる

スケツチも一枚描けず美學論

女事務たもとの下から本を出し

醉眼で見れば歴史は繰返へす

兵庫 川西町 戸倉 普天

間違へて乗つても女叱られず

帽一つ置いて椅子席取つて置き

休閑地買ふより高い葱が出來

福知山 小畑 自由朗

正に非常時今里新地箱切れす

ちよとしやべると町内會の役がふえ

翼賛會ゴテル手本も示す也

三原山曰く來るなら今だつせ

一億一心やつぱりお金が儲けたい

隣組榮園

隣組の鉾唄に成り愚痴に成り

アメリカさん

戦争せにやひまでかなわん國であり
香水をブン／＼させて徴募兵
負ツ振りも世界で一に成り給へ

ホノルル 古川 風竹

嫁つた日は空も一生覚えられ
長期戦下積みになる北支地圖

★

大阪 西川 青美

鯉のぼり二つ流して赤褌

兵庫 水谷 鮎美

唐辛子に氣をひきたてられた夜の父

満月に硝子のわれたのを見つけ

割箸ではさむ酔いのものさびしけれ

額の汗に自由は叫ばれてゐない

徳島 穴吹町 姫田 夕鐘

子を學校へ送り紅茶を入れに立ち

呑むほどに父は日露の勇士なり

世界の動きを父に話すも孝の端

奉天 吉田 水車

旅順聖地巡拜

説明も聲をのんだら雨靈山
春の雨擬音のやうに屋根を打ち

大阪 後藤 青兒

金なんか入らぬ子供に迎へられ

笑つて食へてそれでよい平和

水撒けば向ひの人に叩頭され

智恩院京の女が小さく見え

京極も八ツ橋だけは戸が締り

此處に亦春を忘れた二階借

二女病みて

遠足を案じてくれた處方箋
地下鐵も汽車も往診料と書き

松本 石曾根民郎

石段を登る恩師の別るゝ瞳
竹林に徑あり友の肩細し
交りをぬけ夜櫻の風まとも
二代目を繼ぐ吾なるぞ夕燕
子のいのちたのしく枕はづしてゐ

大阪 正本水客

留守宅はもう荷造が出来上り
配給は表門から這入つてき
落魄の記念の様に子が生れ

元祿忠臣蔵(前進座) 四句

長袴萬事窮して座を正し
上役へ理路整然と座を進め
辭世一首しばしは春の夜を忘れ
誰よりも悲しく坐るくにおもて
満足をして兩親は汽車に乗り
室内を歩き廻つて暗記する

豐中 黒川紫香

金で済む話となつて白らけて來
三度目はガラスを割つたボール投げ
金を貸す財布は横へむいてあけ
貸ボート尺取蟲が端に居る
又電話すると男の別れなり
ハンケチをふつて女のはゝからず

大阪府 柏原町 宮岡白峯

藤揺れる眞下は戀の休むとこ
愛嬌もなく女店員くたびれる
ます喰べる事だけ俺も考へた
日曜雨宇治から濡れて戻つて來
戀に似るこゝろ淋しき墨をすり
約束の場所へ來てゐる雨ゴート

大阪 岩橋双虎

軍靴今笑ひを包む音がする
休閑地馬糞一役買わされる
丸髷に結へば仲居に見えるなり
きつちりと髪も束ねてゐる遺族

神戸 岡田某人

子供幻想——ひる

砂の手をはらへばすでに童謡めいて
子等ころりころりと土に仲がよし
遊ぶ子等緑を魚の如く抜け
遊び呆ける子へきんの風ぎんの風
飛ぶ飛ぶ飛ぶ陽の粉の如し子供達

子供幻想——よる

子等宵の灯に遠くゐて狐めく
ゆふ闇に子等むれてゐて藻の如し
繩とびの背に月があり魚に似る
子等銀の頭ならべて夜を遊ぶ
鬼番の子の背へ夜がつきまとひ

尾崎 酒井斗風

四月二十一日・辭職

浪人の靴を磨いてあてもなく
箱の味かみしめて四十すぎ
間借りして國民服の御出勤

大言壯語あゝさびしさにペンを拭く

大阪 北川 春 巢

結婚一週年を迎ふ

紙^{ペーパー}目醒しがチト狂ひかけ

寝てる兒の顔だけ初夏の蚊にかまれ

孫の出征急に命が惜しくなり

論争へ一言居士が來てくれる

上海へ赴任御自愛祈られる

廣島 濱田 久米 雄

公私共多忙ビヤホールへ出掛け

退官の挨拶といふ胸を張り

検算に見つけたミスでしばし揉め

大阪 魚 住 満 潮

持たざる者持たざる國に生れけり

大臣に訊くことがある昨日今日

開取引元代議士も名を連ね

内の兒もすべり隣の兒もすべり

立膝で男に喰はす林檎むく

極樂か地獄か素焼の壺にきけ

坊チャンの喰べはるパンへ列んでゐ

商人道天野屋利兵衛傳を読む

暖かさ乞食の背の子が笑ひ

晩春の京にて

右は嵯峨いま洛中の鐘が鳴る

大阪 清水 白 柳 子

脳病院みどりの中に白く立ち

水打つた夜店のみどり提げてくる

大阪 中 内 翠 芳

サービスと言ひく醫師は金を取り

鏡見てなるほど俺は瘦せてゐる

裏庭へ玉葱植ゑて二人居る

大學出と言ふルンペンの筆達者

下關 多田 市 多 樓

言譯へだます氣でない嘘をまぜ

剃負けた顎へ女房が塗つて呉れ

春去りし海の廣さの風に立つ

磯馴れた歩みは夢遊病者に似

徳島 濱田 賢 次

眉を引く姉ではあるがさからへず

入營が出來てうれしいハミガキコ

無理を言ふ子供でなくて案じさせ

廣島 大森 風 來 子

映畫砂塵を見て

法律とは知らず魅力を持つ女

藥局へ脚からかつぎ込まれたり

岡山 鈴木 九 坡

鯉の節句

兵隊になれよと鯉が跳ねるなり

米食時間小さくなつて喰ふランチ

初夏の風衛生人夫もやつて来る

クレオン畫坊や好物ばかり描き

大津 鈴木 石 鹿

亡妻一週忌近づく

亡き妻の寫眞へほこりたまつてゐ

釣れぬとて場所を變へてゝ日が暮れた

皇軍の一人くゝに親があり

休閑地利用大きく杭をたて

花曇り象の欠伸を兒が見つけ

よくしやべるおばはん大陸歸り也

武玉川四編研究

(十九)

梅 本 塵 山
森 東 魚
蛭 子 省 二

(469) 煩ふ馬の面へ松明

東魚 元氣があるかないか、其面付を松明でみてやるのであらう。松明だけに凄じい趣がある。(陣中の場合であらうか)。

塵山 大陸の戦地へ持つて行つても、能く通用すべき句であると思ふ

(470) 竹田か顔を物凄く見る

省二 竹田近江の創始したカラクリ人形芝居。大阪道頓堀にあつた。熱演を見て居る。

東魚 考案のカラクリが、自信通り巧くゆくか、緊張し切つた顔付をかく詠んだのだと思ふ。

塵山 竹田が「人形の遺手」と聞ゆるけれども、これは竹田の人形といふ意であらう。

(471) 二日めに雨たれを見る神無月

省二 春雨の残りや時雨神無月(昌黎で、神無月を時雨月ともいふ)「いつはりのなき世なりけり神無月、誰がまことよりしぐれをめけむ。」二日目に少し降つたのだ。

東魚 月が替ると、忽ち時雨をみたといふ心持であらう。

塵山 「雨だれを見る」と云ふの時雨が僅ばかり降つたことが知れる

(472) 取ツて十九に母の斷物

省二 厄年の娘を思ふ母の慈愛。東魚 句法が誠に巧みである。

塵山 茶か鹽か。

(473) 跡先を見て参る瘡守

省二 男にしる女にしる、瘡守祈願は氣がひける。(土は消炎鎮痛作用があるから、土の團子を納めた事は意味がある)。

東魚 人目に掛かる事は、聊か弱るのであらう。

塵山 鼻を袖で掩ひながら、狐鼠々々と参つた者も有つたであらう。

(474) 台所御の字かつくも女也

省二 御の字をつけミダイドコロ

東魚 臺所の品々に、おの字をつけて云ふのも、流石に女らしい。

塵山 現代の女達は、御の字を濫用して、不必要の處にこれを附けて賢こさうな顔をしてゐる。

省二 遂に亭主の事を、お馬鹿さんなどとよぶ。

(475) うき人形の手のひらを漕

省二 一名「浮いてこい」といふ。舟、金魚、人形等水中に浮ぶ玩具。幼兒が娛しむ。兩手を入れ抱て居る水に、浮人形がういて居る。此句は「嬉遊笑覽」の兒戯の部に引用されてある。前篇には「つゝまれて浮人形のうき沈み」があつた。

東魚 水中で手へ抱はふとする掌の上を浮人形がふらふする趣。

塵山 浮人形といふ物は、今と昔と相違するものと思ふ。

(476) 六枚書て跡ハ口先

省二 六枚と限つて居るから判りさうで、今一寸氣づかぬ。

東魚 起請を六枚したゝめるのはあるまいか。熊野へ一枚、何處へ一枚と云ふ風に。

塵山 古書に、七枚起請といふ事がある。

省二 御尤。二月堂や熊野權現から、七枚繼ぎのものを出した。「七枚起請空誓文」なる言葉もある。「三日に三枚、七日に七枚起請誓紙の牛王のうらなく」とあるから、「跡は口先」も判る。

(477) 淡の消るを伽に盃

省二 盃の淡の消ゆるのに、興を覺ゆるのも、酒客には伽となる。

東魚 常盤津乗合船の文句に、早く來て吹け酒の泡、といふ處があつたと思ふ。さうした心持ちの句と思はれる。

塵山 「花に風輕く來て吹け酒の泡」といふ、古俳句を粉本として詠んだものである。

省二 その古俳句は嵐雪の作で、乗合船には其儘利用されてある。「薫りつん／＼花に風、輕くきて吹け酒の泡」と。

(478) 風に向ふへ廻る供廻り

省二 供廻り達が、風ふく方に面しゆく。(供廻りの句は(296)「川留に足の淋しき供廻り」)

東魚 風に對抗して行く、心持ちである。

塵山 大名の供廻りであつたならば、此の句のやうな事は決して出來ぬ。

(479) 水の來るうち寒い居風呂

省二 わき過ぎてゐたので、水をまつうち裸だ、居風呂では一層寒い一持ち運んで据へられるから居風呂と云つたと。水六分位入れてわかし浴する時適宜水を加ふ。「水の來るうち」が判る。

東魚 賛。見付けどころと云つた句。微笑される。

塵山 深味はないが、能く判る句である。

(480) 夜の酢質にことハ教へる

省二 眞夜中に酒屋を起こすのだから、酢が産婦のためで、是非必要であるを話すことを教える。「酢の

わけを聞いて酒屋の内儀起き。焼け石に酢をしたして妊婦にかがせ、氣丈夫にするので、『焼石に酢とは目出度い騒ぎやう』などの古句がある。

「夜の酢としたのは、少し説明がかつても居る。」

東魚 夜中に僅なものに、無理を頼むのだから、常の買物するやうでなく、町噂に頼み込むやう言葉を教える。

塵山 田舎出の下女か小僧であらう。

(481) そつちて撞とくれる龍宮

省二 三井寺の鐘は秀郷が貰つてきた土産物だといふ。『一景は龍宮までも響いてる』、そして暮れるのである。

東魚 撞けとであらう。何か雀踊などの「そつちでせい」と云ふのにもたれて興じたやうな氣がされる。「呉れる」であらう。

塵山 其方にて撞き給へと、秀郷に鐘をくれたのである。

省二 その通り。私の前解取消。

(482) 新田以来笛か届かぬ

省二 「新田以来」は新田が殖えてきた意として、此「笛」が判り兼ねる。東魚 沼の舟から笛を吹く、それは思ふ人に聞えよがしとし沼の一部が埋められ、新田などが開けては、遮るものが多く、笛の音も届かし兼ねる、とでも云ふのか、頗る駄洒解である。

塵山 私には不可解である。

(483) 請狀に良の居らぬかゝ三立

東魚 請狀が未だ提出されず、奉公する本人は、かゝみ立に向つても落付かぬと云ふのか。娼婦の場合のやうな氣がされる。

塵山 請狀も既に済まして、先方へ行く日時が決定した故、心があわただしく、靜に鏡を見て居られぬとであらう。

省二 今請狀がすむだ場合に、私も解してゐた。

(484) 翌のまつりに旅の寝心

東魚 發見物に、其前日から他家へ泊り掛けで行つてゐる場合であらう。同じ江戸の中にあつても、下町から山王祭を見物に行くとしたら、泊りがけにでも行かねば、しみみ見る時間がなからうと思ふ。それで吾が家と違つて旅にでも出た寝心地がされる。

塵山 明日の祭禮を待つ心は、旅寢をして翌日の晴雨を案じる心と、同様であると云ふのであらう。

省二 心持がそはくして、恰も旅の寝心地のやうに落ちつかぬので明日の運動會をまつ少年時の心持ちなど等しい。

(485) 此松にまた盗人の匂ひあり

省二 『熊阪は物見の松の下で喰き』で、熊阪のやうな盗賊が松に上つて、旅人を見出しては悪業をしたとの話があり、その物見の松はあちらこちらに残つて居る。斯る傳説を

聞いて松をみると、何んとなう盗人臭い。

東魚 今もまだ居さうに思はれると云ふので、「匂ひ」は面白い表現。

塵山 盗人の匂ひは奇抜である

(486) 龍の通りし跡に外科

省二 龍は龍巻の事。「外科」は外科と讀ませるならん。外科を祭のなりで呼びにゆき、内療に對し外科。龍巻の被害で負傷者が出來、外科醫が來たのだ。(昔時は龍巻は龍の仕業だと思つてゐた。天上を翔り風雲を起し雨をふらす)。

東魚 前説賛。

塵山 龍巻は海上に起る現象で、陸上のは旋風と云ふので、昔の人はこれをも龍の所爲としたのである。

省二 龍巻は昔は海陸共に稱してゐたやうに思ふ。旋風も龍巻の一種。何となく尼に成日の心持

(487) 省二 心は定つて居るが、尼と成る日の事を思へば、何んとなう寂しい氣分にしたる。

東魚 聽て尼となる日の事をふと思つてみると云ふのであらう。

塵山 尼のみでなく、僧も同じ心持であらう。

(488) 破る蚊のはかなく袖に踏こたへ

省二 今に命の絶ゆる残つた秋の蚊だ。やつと袖にとまつて、最早人を刺す氣力もない。東魚 袖であつて誠に面白い。妙句と思ふ。

塵山 漸くに踏こたへて、頓に倒れんとする態である。

(489) その日ハ三保で暮る羽衣

東魚 「てん／＼とんで取り返へし」まで行かない。歎き暮れてしまつた。その日である。

塵山 謡曲の「羽衣」とは、その趣が大いに違ふ。

省二 伯良といきさつて三保泊り。

武玉川四編研究正誤表

(盤) (頁) (段) (行) (誤) (正)
二〇七 十 四 九 兩 誤
二〇八 十一 三 五 兩 誤

大坂 名物 松前屋
心齋橋筋 本舖
出張店 朝日ビル 専門大店
常陸南(四四六番) 常陸北(八二〇番)
布 毘 前 松

樽柳作近

選郎路



暴利とも云はずに醫者へ拂つとき 和歌山 秋月宏方

代價は肉も賣らねばならぬこと 同

鳩時計鳴つた坊つちやん起きませう 同

鶏の癖も見つけた病み上り 同

代用食社長室へも運ばれる 同

自爆して蠟燭遂に世を終り 同

顔色をさとする子供のふしあはせ 同

東支那海をゆく

爆撃をされぬ感謝をして通り 釜山 越智伽藍

基隆 上陸

第一步先づ基隆の雨に濡れ 同

タツキリ溪 (二句)

吊橋へ度胸を見せはしたものの、 同

家とへば蕃兒は山の上を指し 同

鷺 鑿 鼻

鷺鑿鼻こゝは南の端の端 同

清水 断崖

二千尺悲壯な顔で通りぬけ 同

中支戦線活躍の森河鐵生柳兄へ (二句)

算盤珠弾くが如く銃を打て 松江 本庄進一路

喧しい主人に瘦せた夫人ある 同

三等局爲替係は無口な娘 同

花の山へ來ても兵隊歩調とれツ 同

冷笑を少し感じた拾ひ物 同

卒業へ國民服を被せられる 同

純綿は箆笥の中で年を越し 姫路 岩崎水虹

お茶屋でも理性が強いお醫者さま 同

違ひ棚まで先代の趣味のまゝ 同

横顔の鼻の低さがもの足らず 同

名取り許されて踏むなり春の草 同

愚息徴兵應召

征け豚兒日本の誇り汚すまい ハワイ 長谷川 岬

出 府

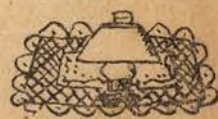
優待は宿の鏡に知る姿 同

引き眉の唇に親しむ氣になれず 同

義理人情云ふは町での成功者 同

盃を持てば大名氣取りなり 同

物言へば誤解するから笑うとき 岡山 生子 洋子



出ひ思の州徐

子來風森大

「今、われわれの郷土部隊は前方約二十里の地點で、強敵と相對し激戦を展開中、われわれ補充要員は一刻も早くその本隊の軍旗の元に合流しなけりやならん。」
「氣をつけ！。これから直に出發。」

内地から一週間程前に上陸した兵隊は、幾百里のガタガタ線路を輸送され、これからいよいよ歩兵の本領を發揮して行軍に移らうとしたその時、輸送指揮官殿がそう叫んだ。

一齊に兵隊が緊張した。昭和十三年五月の終りといへば、まだ徐州が占領されてから開かない時だつた。至るところに敵の死體が横たはり、友軍に空爆されたのか、それとも退却に先立ち破壊して逃げ出したのか、徐州はゴミダマにはきよせられた玩具のやうな街に過ぎなかつた。

酒津の櫻

俄か雨

釣橋がゆれて櫻が又も散り

同

降る雨へ走る覺悟の荷をまとめ
不意の客母娘臺所であわて
おかしくも老婆のまげの精巧な
轉業へ傘の屋號が淋しさう

同
同
同
同

大臣に同情もして小商人
失地回復むかしの地圖にある折目
儲け高電車と分ける出開帳
この頃は釣の獲物もあてにされ

同
同
同
同

一燈園花見の人にのぞかれる
洋装で来ればよかつた風が吹き
野球の話床屋の方が好き
パーマーをかけて女中はいとまする

同
同
同
同

國策に沿ふ一年を無事に瘦せ
船室が取れず吉野の花も散り
ボケツトへ辭表は遂に皺となり
氣違ひに此の世の中はとぼけてる

同
同
同
同

日めくりをめぐり忘れる目出度い日
女中の瞳に御主人がちとかわいそう
そう云へば主役が好きな娘に似て居
嫁が来て母も出好きとなりつらむ

同
同
同
同

サーカスの人出に狭い町と知る
タイピスト暇をみつけた手を洗ひ
大掃除古新聞を読む日なり
下手くそな琴が聞える春の雨

同
同
同
同

千人針母がトップを切つてやり
大阪山川富士

同

月末の赤字へ妻も口を出し
寄書を職場の晝へ持つて来る
配給の米一粒もこぼすまい
賣り切れの見本へ春の陽が當り

同
同
同
同

性格はだまつて細い文字を書き
あわれ散る春の姿を見つゝして
山道の人家に近いおそ櫻
まざぐと自肅してゐる百貨店

同
同
同
同

ビル霞むこゝは大阪御堂筋
算盤の桁間違ふも春なれや
あやまりに罷出たる運送屋
歸還兵靴は現地で買つてゆき

同
同
同
同

軍屬に再び夕日赤赤と
黄塵の中敵を追ひ敵を追ひ
會議室に隊長の寫眞懐しき
美しき夢みつゝ春のボートかな

同
同
同
同

ひどくロマンチックな話宵の鋪道
未知數のまゝ春が近く日を迎へ
或日ふと職長の身に愚を感じ
火に集ひ待遇悪いとの話

同
同
同
同

月光に武藏の劔は輪を描く
藥家藥家墮ちくる如き陽のかたまり
つくつくし遠き記憶の甦る
かゝる夜も國戦へり風轟々

同
同
同
同

二階借柱へみんななにかかけ
歸省の車中にて

同

驛を離れていくと、支那人
の姿は一人も見受けられず、
道路へ崩れ落ちた兩側の家々
がこれはただの空爆とは思へ
ない程荒されて、美しい目を
見張るやうな山水の畫が泥に
まみれて散らばつてゐたり、
散髪屋の大鏡が割れてそこら
一面ざらざら光つてゐたり、
紙屑と一所にはき出された中
から古い中華民國政府の札束
がばら撒かれたり、これはも
うまるで、復興するとは思へ
ない程惨めな街の姿を横たへ
てゐた。

その崩れかけた軒毎に、幸
福は家に在りとか、家内完全
といふ意味らしい紙片がちら
ちら私の目についた。すると
私は、それらが目に映る度に、
彷徨へる良民の姿が浮んで来
ると、敗戦の惨めさをはつき
り故國のひとつと知らず方
法はないものかと考へた。

しかしまた長い驛のある家
の前に来ると、その土驛には
必ず抗日思想を植ゑつけやう
とする宣傳文が目についた。
その宣傳文は僅かな私の漢文
の智識でもみな判讀出来るも
のばかり。それは、まるでわ
れわれ日本軍が匪賊のやうな



もう故郷に近いネクタイ締めなほし
巡禮に出雲いゝとこ花さかり

同

腹の立つ日の座ぶとんが眞つ四角

京都馬場理公

闘志なきねこのまなこへ腹立てる

同

歩けくゝの唄で義足の勇士来る

同

商店に茶碗も洗ふ女事務

東京山田宙望

更生に支那語の本を忍ばせる

同

樂書を書いては消して孤獨癖

同

サーカスは風の如くに暖を追ひ

同

山彦のいつそ楽しい親子連れ

同

妄論しかけて妾だと氣付き

徳島縣矢田壽澄

噓つきにされぬ土産を買ふ時間

同

軽い事故大安だつたせいにする

同

女教員母として出る日曜日

松江梅本登美也

二階借靜かな下が氣にかゝり

同

俾夫今日は走ると障る客をのせ

同

軍屬の兄より

子のぺんきようはげまして来る軍事便

大阪山本葉光

指の先あまる軍手で留守護る

同

兵隊の子で地圖を見るすべを知る

同

防護團残らず飛行機にみとれ

大津田高田抱逸

小使の役目へ今日もズブ濡れる

同

表情を變へて所長も行く花見

同

生きて行く手段に曝す脚線美

大阪南要兒

前に居る人のシャツにも穴があり

同

鉛筆の友の手紙の世帯じみ

大阪橋本美奈子

萬歳をさせて寫すも子澤山

同

皇后陛下の行啓を拜して

傷つけど之の感激は再起を目ざす

神奈川尾崎保柳

尊き御言葉を院長閣下に戴く

たゞかしこよりいたわれとのたまへり

同

お遍路の影長々とたそがれる

岐阜藤井紫朗

愚痴捨てゝ只職域があるばかり

同

あるだけの皺が笑つて孫へ来る

大牟田上村十四之

誇らしく買ふ列に居る慰問品

同

ロブウェー女車掌はよく太り

大阪新谷柳風

火葬場なれど櫻は遠慮せず

同

歩けくゝ子のヨチくゝに總がゝり

愛媛縣木村棟友

軍需工嫁降る程とほざいたり

同

青春のノートに甘き歌謡曲

布施岩本晴美

約束の入籍届、戦地から

同

娘二人あれば御近所うるさ過ぎ

廣島縣松永町平川久枝

食慾がなくなる程に味をきく

同

町籍が夜逃げこゝろを落付かせ

大阪堀毛一龜

棒のやうな暮しつゞいて飽きもせず

同

てふくゝのそれでも目的地には着き

廣島縣竹原町西野みづほ

國民服今日町葬の列にゐる

同

づうづう敷も羞しそな嬪を見せ

堺村上角堂

千人針泣ても呉れる人斗り

同

言ひ負けた弱味ある子のさみしそう

下關市多田二堂

春は良し見知らぬ人と歩を合せ

同

外出の時だけ使ふ眼鏡買ふ

大阪吉川琴聲

冷靜になれば易など常識だ

同

野戦にて

推茸の様に軍靴が水を吸ひ

和歌山米田春童

轉送のバスへ瞳がうるんで居

同

亂暴な兵隊が攻め寄せて来る
ことを警告されてあつた。

私はそれを見る度に全身の血
が凝結し「これやわれわれが

鬼のやうな不道德な兵隊であ
らうか？」と反省させられる

程、美辭麗句で書き並べられ
てあつた。これでは何も知ら

ない支那の良民こそ迷はされ
るのはあたり前ではないか

と、私の胸へぐつとせまつて
来る新しい力を感じ、われわ

れ一兵卒たりとも、銃を撃ち
合ふだけでない任務の重大さ

をひしひしと感じた。

戦闘の経験は勿論、來たば
かりのわれわれは、見るもの

すべてがめずらしかつたが、
此處まで歩いて來ると、背囊

の皮具がぎゅぎゅと兩肩をお
しつけて來るのを感じた。内

地を出發する時は片手では持
ち上らなかつた背囊へ、途中

からまた實彈〇〇發と、鐵砲
が増へてゐた。

間もなく石疊の敷きつめら
れた街へ出た。この邊りは幾

分破壊の程度は少なかつたが、
家の戸といふ戸は全部たたき

壊されて、兩側の家からむつ
と臭氣を感じた。が、その頃

からもう私は街の様子を観察

藤咲いて母と来た日のまゝの池 名古屋 松井 静子

早熟と云はれて親のない子供 同

その元氣戦地でしつかり頼んだぞ 大阪 小川 恒明

兄出征の日

言ふ事はない只孝行を頼んだぞ 同

千年も生きてゐる木をふと恐れ 尼崎 飯尾寄典史

病付いた頃だつづじが又も咲き 同

四月一日より小學校、國民學校

とな

今日からは小國民として通ひ 大阪 佐野 牛歩

インクライン女事務居て賑やかし 同

出勤表枕元にも貼つておく 大阪 富岡 巨人

男には腕力の手もあるんだぜ 同

青空に處女の誇の美しさ 大阪 藤森小雅子

自殺でもしそうな春の此の人で 同

バス走る名所へ續く麥畑 大阪 中西 彌生

明日知れぬ年にやつぱり金の事 同

ボイラーの前にしやがんだ物思ひ 大阪 榊岡 詩朗

水引の紅白に似た夫婦です 同

緊張が過ぎて笑ひの無い花見 長野縣 上山田 佐二木 千隈

役附になつて商賣手につかず 同

妹のある戦友はさわがれる 布 施 上田 翠光

此の邊で對陣したい月が出る 同

言ひ負けて笑つた母は老けてみえ 大阪 平井 龍川

日記帳父もやつぱり若かつた 同

日本はせまいと歩いたやうに云ひ 鳥取縣 石見町 伊藤 秀坊

働いた心強さが寝をべつて 同

それゝの心で誓ふ遺兒部隊 大牟田 園田 初舟

日ソ中立協約

押しの手を見せて世紀の握手なる 同

配給券病む手に重く重く受け 愛媛縣 松前町 佐伯 鷄城

母と来てサーカスむごく／＼見る 同

教科書へ子の眞剣な顔があり 神戸 廣島 湯淺 小坡子

見送りを辭退されたる曲り角 布 施 福原 麗美

言ひたい事言つて世間をまだ知らず 小谷 小谷 華素兒

この下に兵隊さんあり鯉のぼり 伊 丹 岩 井 泉

吊り皮を持つにたしなみいる女 大阪 永田 六龍子

御祝儀を戴きました顔になり 廣島縣 竹原町 黒本 芳泉

獨かと尋ねて巡查微笑し 大阪 保田 呆人

通帳の米きつちりへ泊り客 堺 野島 神樂

人間の丸さ六十を稼ぎにで 大阪 青野 花笑

新世帯早一ヶ月も立ちました 大阪 堀 秋星

本持つて今日もペン屋へ並びに來 大阪 松浦 帆船

うらぎりの涙に夜風なまぬるく 大阪 中野 延枝

藪入りに大阪辯の子が戻り 松江 恒松 湖雪

處女會の幹事次々嫁して行き 西ノ宮 三宅 花美

紅バラを活けて外出の仕度する 兵庫縣 花柳 蘭子

新體制舊い理想が割り切れず 大阪 松永 青雲

交叉點巡査は氣の毒なほど怒り 大阪 菅 平行

口紅が春の車中にゆれ眠むる 大阪 松村 茂路

舞ひ上る吹雪へ歩哨きつと立ち 蒲 洲 並木 南風

銃後々々不平を捨てた事務疲れ 兵庫縣 河合 明子

バラソルの行衛櫻の咲くところ 松江 吉岡 笑々

魚釣りの話故郷も釣れるとこ 松江 水谷 夢生

花の下芝生へにげる子をつかみ 松江 石原 まさを

朝禮は終りこれから職域に 松本 西藤 義春

して歩くことは出来なかつた。

およそ三十分程歩いて來たで

あらうが、私の肩は背囊にし

めつけられて汗びつしより濡

れてゐた。おまけに、石の上

を兵隊靴がたり始めた。かう

なると私は頭を前に突出して、

下ばかり見ながら前の戦友の

足跡を拾ふやうに前進した。

時々異様な物音をたてて兵隊

が走つて轉んだ。また轉んだ。

起き上らうとして又倒れた。

すると私までも何時かあんな

恰好で倒れるのではないかと

思ふと、しばらくは背囊の重

さも忘れて歩いていつた。水

筒の水が腰を濡らしてチャブ

／＼と音をたてた。

街に住めば

高橋かほる

文樂の幕合にやきの駒下駄

が揃へてあつたので、それを

履いてぶら／＼と十合へ行か

うと御堂筋へ出たものゝ通行

の激しい事よ仲々急に向側へ

越せぬ、やつぱり駒下駄は牡

丹燈籠では無いがカランコロ

ンと廣い庭で履く物ですね。



評月 川柳一 筋

葭乃・丹 路・鮎美
某人・紫香・潮花・亞純

某人提出 近作柳樽

いさかひし人から春のたよりが来

潮花 Ⅱ よろしいねえ。いさ

かひしの最初の出が良い。これがいさかひをした人であるから、この句は生きてゐる。

吾々が普通の仲の良い人から手紙を貰つた時よりも、いさ

かひをした人から、この春のたよりなど貰つた時の方がも

う一つ友情を深めるかのやうに思へますネ。この點、某人

さん！何か意見が生まれませんか？

某人 Ⅱ この句は字面だけからみるとスウーつとしてゐて

言ふことないんですが、心理

的な方からみて面白い句だと思ふんです。それから春のた

より、といふのが割合に呆けた感じがあつて、冒頭に出てゐ

るいさかひし人といふのと對照が非常に効いてゐて、句全

體が一種漂渺としてゐる。それに水客さんの提出してゐる

涙など吸つたハンカチ洗

つてゐる

も同じ作者の句であるが、やはりスラつと身を躲けてみ

てゐる。しかもその見方が決して冷たくなく女性的な柔か

みも感じられるんですネ。時に鮎美さん、どうです—

鮎美 Ⅱ まあ言へば若き女性

の放圓狀態。非常にまどらか

な句。そして文字の排列から受ける感じも良いものがあります。

葭乃 Ⅱ この句の調子は、ス

ラつとしてゐますが、いさかひし人から春のたよりが来た

といふやうな事は瞬間的に感情が動く少女の時には有りが

ちな事で、句の内容から受ける響きが日常茶飯事すぎて、

妾には刺戟がありません。それから「涙など」の句、斯う

いふ題材の取扱ひ方は何かセンチメンタルで女流作家がど

うかすると陥り易い弊害ぢやないかしら、この人の句では

青春謳歌して蟲媒花風蝶花の方がまへの二句よりは、

はるかに佳いと思ひますけど

某人 Ⅱ つまりね。その「蟲媒花風蝶花」の句の同じ作者

が、さつき僕が言つた二句を作つたといふ事が僕には單な

る女性の感傷だ、とは言ひ切れ

れないものを感じたんです。

葭乃 Ⅱ 然し、妾にはこの人が、斯ういふ風な傾向に流れ

て欲しくないのです。

鮎美 Ⅱ ユリエさんのね。繕

はざる柳心の溢れた生々しい句だと、たつた今感じたので

すが、葭乃さんの仰言るのはリードせられる意味の御言葉であつて、某人さんの言つて

られるのは現實の生々しさから出てくる即ち川柳を稱揚し

てゐるのだと思ひます。成程作家は斯うした偽らざる體驗

詩をものにして、横道に外れず、葭乃さんの言はるゝ、よ

り良きものに精進して欲しいものだと言ふことを感じまし

た。

某人 Ⅱ これはネエ。いはば誰もが通る道筋で、それ丈葭

乃さんが危ぶんでゐられるわけですが、僕の見たところでは、その誰でも通る道を、よ

くしつかりと通つてゐる、さういふ感じを受けるんです。

—と言ふのはこの作家は單に斯る感傷で終つて了ふ人では

ないといふ見透しがついていたから敢てこの句を何の惧れもなしに推奨する理なんです。

鮎美提出 近作柳樽

病人がガラスをふいてく

れと言ふ 飯尾寄典史

丹路 Ⅱ 言はれた方は病人の看護やら身邊俗事で忙しくし

てゐる。それに反して病人の方は、—まあそう、たいした

病人でないと思ふんですが—

その心境が、暫く雑事から遠のき、身を安めてゐる間に澄んでくる。さういつた二人の對照もよく出てゐるし、又病人をしてさう言はしめた病人の澄んだ心境も、ものを言つてゐると思ひます—

某人 Ⅱ 僕はネ。この句はよく見た句といふ感じを受け

る。奥さん、どうです！

葭乃 Ⅱ そうですネ。病人の感じが良く出てますネ。

某人 Ⅱ よく見たといふのは何處かでよく見た、……

葭乃 Ⅱ あゝ。さういふ意味ですか。よく見る句ですネ！

丹路 Ⅱ 僕の句の中にも病人が教へてくれた雨の音

といふのがある。

某人 Ⅱ 時計、時計ネ。時計なんかを入れて有りますネ。

鮎美 Ⅱ この句は私もチエツクしてゐたが、感覺美はない

が病人のヒスもなくなつて、長い闘病と思ひます。この場合硝子は心の曇り、生活の曇

りを言つてゐるのではないですか。何かそこに含みを與へ

たい氣持ち……。

丹路 Ⅱ その今鮎美さんの言

つた觀察は、鮎美さんの感受

性が言つてゐるのであつて、

僕もさいぜん、澄んだ氣持と言つたが川柳を知らない人が讀めば病ひの單なる潔癖性と採りはしないか。川柳に相當年期を入れた人は良い方へ觀賞するし、川柳に縁のない人は非常に低調な句に採つてしまふ。サアどちらが、ええのかわるいのか？……

鮎美 丹路さんの句意によつて、見方によれば高くみる場合と、低くみられる場合がありますネ。

丹路 さうですネ。

鮎美 それは、まあ、今までもある事です——

紫香 硝子と、持つてきたところは物質慾を通り越してゐるんですから高い氣持だと思ひますネ。病人はよく無理を言ふもので、我家の硝子が汚れてゐるのを病人に言はれてハツとする事がありますネ。かういふ風に考へてゆくと心のうちに動いてくるものがあるんです。

丹路 ふうーん。

鮎美 或ひは、ひよつとすると寄與史さんの實感じやないかと思ふんです。病氣の苦しい中から川柳によつて救はれてゐるものがある。

白柳子提出 近作柳樽をむくことと考へた灯の細さ 平川久枝

亞鈍 氣の弱い女性の謀叛ごろを、川柳で、しやれて言へば斯ういふ句になるのかナア。それ文け。あとはみんなから意見が出たら、答へやう。

某人 潮花氏！どうです。

亞鈍 潮花君なら出さうだな。

某人 出さうなもんだよ、だ。(笑聲)

亞鈍 結局、この人は叛けなかつたんだらうな。

葎乃 そうです。闘つてゐる句です。

丹路 闘つてゐるといふより、叛かない事に、甘んじてゐる句。それは灯の細さに出てゐる。

葎乃 叛かない事に達しるまでの前提でせうネ。

鮎美 灯の細さが問題ですが、叛く可くいろ／＼反撥してみたら、結局叛かれないと太く心に誓つて自分で安心し、そして一息ついた眼でみた灯が細く見えた、そうした心境とも言へる。結局反撥したことが灯が細いのです。反

照的な下五なんです。

葎乃 灯の細さは、その人の理性がさう感じさせたのでせう。でもこの句は机の上で書いてゐるやうに思へて……

某人 さうですネ。

葎乃 スタンドの灯かしたら

丹路 或ひは蠟燭の灯かな

亞鈍 それは違ふ。灯の細さは感じて、假初めに叛かうとした氣持に、ひつつけた丈けなんだ。叛くなんて、どう

てい妾には出来ないワといつた氣の弱さを灯の細さで出したんだネ。此奴は少しフロイドの精神分析が必要だぞ。

某人 灯の細さに騙されてゐる。

丹路 ひつかゝつてゐる。

亞鈍 斯ういふ句は、どうかなあ。まださきのユリエさんの句なんかだと、少女のセンチメンタルも兎に角川柳の上で一應成人してゐる點が買

へるが、この句はまだ川柳に成育されてゐないセンチメントがある。「若草」か「少女畫報」の文學少女のまゝなんだ。某人 この人は、此處句を作る人ではないんだ。或ひは現在、さういふ心境に入つてゐるなら何とも言へんけれ

ど、今までのこの人の句風からすれば、こんな弱い事でもくてもつと逞ましい簡単に言へば男みたいな句で押している方がこの人としては作句上、ふさわしいんぢやないか。そんな氣がする。

某人提出 川柳塔

店番が炬燵から出る諏訪の街 橋本綠雨

某人 何の氣もない見ただけの句。しかも、どこか、惹かれるのは作者に、別段の慾がないから、マア言つてみれば一種の枯淡、一つの境地に達した眼、そんなものが感じられ風俗畫的な何か寫真雜誌の印畫でも見てゐるやうな感じがする。この句全體から

作者自身のむつとした面構へまで泛ぶのは僕の見過ぎか。亞鈍 然り。見過ぎと思ふ。この句から綠雨氏の面構へが出る道理がない。何故なら、この種の枯れた川柳といふものは人間性が全然出ないのが普通だ。つまり作者の個性とか、顔なりが全然浮ばないと

ころに斯ういつた没我的な川柳の存在理由があるのだと僕は考へてゐる。實は僕もこの句を提出しやうと思つたのだ

が、さてどう説明す可きか方法がつかなくつた。大體それは無理なんだヨ。今月の綠雨さんの句はみな佳いネ。その次にある。

節米に晝は信濃のそほと

決め

の句などもちつともケレン味がない。

某人 さう、説明できない句だな。完成してゐるんだ。それでめて見逃してしまふ句でもある。

亞鈍 完成もしてゐるが、第一問題にするやうな性質のものぢやないんだよ。鮎美さんではないが、これが川柳の醍醐味を知つた人の句かネ。(失笑)

潮花 旅行家には、こんな句が多いですナ。

鮎美 この句は、みんな異議なしですナ。

丹路 綠雨さんの句を詠んでると他のひねくれた句なんか、みんな厭になるなあ。葎乃提出 川柳塔空地利用あれあれみんなとうがたち 夷一笑

が能ではないからネー。

潮花Ⅱ結局は、人がやるか

らやるだけの話で何のためにやるのか、もう一つ研究心がないのですなア。

某人Ⅱ科學精神の缺如。

紫香Ⅱ附き合ひの百姓です

ナ。

潮花Ⅱやつぱり、奥さんの

やうにのんびりしてますな

ア。(笑聲)

某人Ⅱそう。調子にネ。

紫香Ⅱしかし、一寸間が抜

けてゐる。

某人Ⅱそれがこの句の効果

でもある。

紫香Ⅱこの、あれあれなん

でせう？

丹路Ⅱこれ、自分が作つて

ゐて、知らんまに蓋がたつた

ので、あれ(早口で)といつ

た驚ろきの聲と違ふか。

紫香Ⅱあゝそう。あれまア

といつたところでせう。

蔑乃Ⅱこれは人が作つたの

を見て、あれ、あれ、(ゆづく

り)といつた意味です。

某人Ⅱその通り。僕は奥さ

んに賛成。

丹路Ⅱそうか。そう言へば、

そうだな。

水客提出Ⅱ同舟近詠

入試合格の朝からハーモ

ニカ

潮田明坊

紫香Ⅱこの入試合格は中等

學校だらうと思ひますが、小

學校時代所謂少年から青年の

一番端つこである中等學校一

年に入つたといふ自分の心に

年をとらせたといふ喜びが、

最後のハーモニカで出てゐて

面白かつたと思つたのです

が、入試合格の朝、このハー

モニカを吹く時間が、果して

あつたかといふ疑問を持ちま

した。どない、思はれます？

潮花Ⅱこれは入試合格の翌

朝ですナ。

紫香Ⅱこの句からやつたら

その日の朝です。氣持はよう

判つてますけど。

潮花Ⅱ「入試合格朝からの

ハーモニカ」とのを朝からの

次に持つてくれば句意は鮮明

になるんです。

鮎美Ⅱあゝ、そういう意味

なら判ります。

某人Ⅱ東京の學校に通つて

東京から郵便か電報で、早朝

に合格の通知が來たとすると

……。

亞鈍Ⅱさういふ事もあり得

るネ。「愚息遊學」と前書もあ

る事だし。

某人Ⅱ親も心の中でハーモ

ニカを吹いてるんだよ。

紫香Ⅱ實感ですな。親子共

嬉しかつたといふ風に――

丹路Ⅱ調子の點でどうかと

思ふんです。入試合格の朝、

らではネ。

鮎美Ⅱまあ結局、「入試合格

朝からのハーモニカ」が本當

ですネ。(亞鈍筆記)

片瀬醫學博士述

「安産のために」冊子呈上

安産のた
めに

妊娠としての大切な責任
はカルシウムを補給し
て諸病を防ぎ、子宮の收
縮を容易ならしめ「安産」
へ導くことにあります。

猶林醫學博士 推獎
片瀬醫學博士 監査



カルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店



蘆屋句筵

麻生 葭乃

朝からの土砂降りに出騒を

折られ、鋭々氏の門を踰つたのは案内の定刻から二時間は遅れてゐた。なまやさしくない春雨に眠覚めるばかり緑を増した植込を左右に見て、獅子頭のあるボーチに立つてベルを押すと、古風なデザインを施したドアがさつと開いた。滋味のある洋館の壁に蔦の蔓が絡みついてゐるのも雨の中を歩いて来た私共の疲れを休めさせた。ホールで雨ゴートを脱ぎ、時代色溢るゝモンペ姿の女中さんの案内で、日本間を幾つか通つて、お庭先にそうた廊下を廻ると、早先客の話聲が正面の應接から聞えて来た。和服姿の鋭々氏に挨拶をして路郎と私は柔かいクツシオンにふうわりと腰を下す。ソファアには丹路、某人、鮎美、山雨樓、紫葉の諸氏が着席され、青美氏はまめ／＼しく椅子テーブルのお世話話をされてゐた。天井から吊

り下つてゐるランターンも置物の壺もすべては鋭々氏のお嗜好みによる装飾の品々と勝手に想像して其日の席題「春」と「座談」の作句三昧に入る。

ついで雨月、五月男、亞鈍の諸氏が出席された。「今日の席題は各題二句ですよ」と何處で相談が決つたとはなしに出句数は二句限りと制限された入選しない時は入選するまで作らねば歸さないといふ事になり、そろ／＼終電車の時間を氣に病む取越苦勞人も出て来た。

披露の席と定められたお座敷からは、表前裁が見下ろされ、雨上りの風に櫻吹雪が立樹を掠めて飛ぶのも春の憂ひを深めさせた。披露の結果は全没者一人も無く、皆々残業の憂目に遭はず、まあよかつたと云ふ顔になる。

鋭々氏夫人のおてまへで順々におうすを頂戴しながら、近頃のお菓子の話から次々と

時局向きの話題に移つて行つた。最近渡満された紫葉氏からは次のやうな話があつた。

「満人が日常に喰うてゐるもの、着てゐるもの、住んでゐる建物などは、彼等の先祖が永年の體驗から割り出したものであつて、其土地の氣候風土に適うてゐるのだから、日本人も満洲に住めば、彼等の如き家に住み、彼等の攝る食物に馴れ、彼等が纏ふ衣服を身につけるのが合理的であるにも拘らず日本人はなかなか因襲を打破せず「あれは満人の食べるものです」と土地に適した食ひものを蔑視して刺身を食ひ、一東四十錢もする蒺藜草に舌鼓を打つといふ風であるからして生活費も高くつき、又一面かような點から自然、満人とも親しみにくくなるのです。満人にこちらの風を習はせようとせず、日本人はもつと積極的に満人の風に親しんでからなければ、満蒙啓蒙などは出来ないことです。ことに若い婦人が内地と同じ服装で寒さに脚などが紫色になつてゐるのを見ると、あれでは腰が冷え不妊症になります。」と紫葉氏は生

めよ殖やせよのモットーで話を結ばれた。

世界中お馴染みでない國はたつた二三ヶ所だけであるといふ世界漫遊猿飛佐助の青美氏のお話から斷定的なものを次に紹介する。

「フィンランドのヘルシンキ市やスエーデンのストックホルムでは宴会などには疊三疊敷位の大卓子へあらゆる御馳走をならべて、てんでに自分の好きな物を取つて食べるのですが、私は馴鹿の燻製を食べました。馴鹿は大變な御馳走なんださうですが、とても臭くてむかつきが來さうな匂ひです。又印度では送金をするのに誤配をおそれ札を半分に切つて二回に送つてゐます。受取人は後で纏ぐのです。それに紙幣はなるべく汚れたのが喜ばれます。新らしいのは贗造があるからです。それと反對にフランスのデパートなどではお刺金の紙幣を渡すのにも綺麗なセロハンで包んでゐます。なほ町噂のなになりまますと其上からリボンをかけたのもあります。」

まだ／＼珍らしいお話を聞かせて頂いたがスペースの都合で畧する事とした。

席上吟

路郎師選

座談ふと途切れて時を刻む音

アトリエの座談繪具を塗りながら

座談なかばへ春の時計のアクセント

窓近き木の芽座談の高笑ひ

同 亂髪男座談にむつとする

座談會何んにも言はずじまひ也

座談巧者明治の御代を特にほめ

座談にも其の商才をきらめかし

座談會連記笑ふたことも書き

山の見える談しと無心かけ放れ

座談がはづんで近衛さんのことに

同 春や春てふ御姿が雨に遭ひ

春風に廣く住んでる貸別荘

同 春のハイク質問攻めでくたびれる

同 春風秋雨塔婆も既に名をとめする

同 春怨は障子の紙魚をみつゝ思ひ

同 定期券春の日附を見せて限れ

同 合シヨールさへも重たい花疲れ

同 春霞米の話はしないこと

同 春の儂たゞ良寛をこゝろざす

同 路郎

葭乃

亞鈍

紫葉

五月男

青美

路郎

山雨樓

鮎美

某人

丹路

亞鈍

路郎



箒と盟に就て

石曾根民郎

「迷信と川柳座談會」といふ記事が本誌の新春號に載つたのを見て、興するまゝに想ひを湧かせた。

歸つたを見れば箒も恐ろしい (古川柳)

昭和八年刊の和田好陽君編「大阪の俗信」に、箒を逆に立てて手拭させておくとか客人が早く歸るとある。この俗信は全國到處にはびこつてゐる。子供ごろに不思議がつたことが、今でも信じられてゐる根強さに私はひとしほ何ものかを感じなければならぬ。

箒が來ると箒を内侍立て (古川柳)

句當内侍は新田義貞の戀妻であつたが、溺愛のあまり勝

運をいくたびか逃がして、戰略上味方に多くの破綻を來たさしめ、悔を千載に残した俗説がある。この句の忠臣楠正成の來訪は、いたく内侍のころをふるはせ、人の氣も知

らない野暮天とばかり、巷間に傳はる秘術で楠公の擊退法を内助の功にあらはした。色に迷つた義貞は、内侍が戀妻として何よりのものであるといふことのみに血潮を昇上し傳統に生きる武人氣質を失墜しかちであつた。こゝろすべきである。

長しり

なが尻の客、夜の更けるも知らずはなしてゐれば、女房ぐつと退屈して、箒をたて、歸る咒をすれば、そろ／＼煙管をしまさう「ヤレうれしや、もう歸るさうだ」といふところに、箒がばたきつゝと、また煙管を出す。女房大いにせきこみ、箒をたてればこゝろ／＼、客も煙管を出たり、いれたり出したりいれたり。

寛政五年刊「笑府餘進米」

やゝもすれば健全なる笑ひを忘れがちな、きり／＼した氣概に固つた現代人の鼻柱に、この江戸小咄の寸鐵人を刺す川柳精神にも似たこゝろよさを霧散したいものである

長座

いつも來ると長居する客が歸りし跡にて主人小僧にむかひ今度あの人が來たら箒に類冠りをさせて立て置けといひつけへるに次の日また來りしかば小僧こゝぞと思ひ早速いひつけ通りこしらへしがもしやまた違つては居まいかと、客と話しをして居る主人の前へぬつとさし出し「これで宜しうござりますか(今人情風事作)」

明治三十二年刊「滑稽類纂」

早まつた考へである。注意深くありすぎたゝめ間が伸びて捉へどころのない氣拙さだ。至極世間知らずな私などのくりかへす仕業に似た小僧さんの小心翼々然たるところに戒められる。

基敵へ逆さ箒も役立たず (柳太郎)

現代川柳でやつとこの一句を見つけた。不敏な私に、まだあつたら教示していたゞきたい。

粉藥

ある女郎色男を待つところへ、

好かぬ客人來り、大きにふさぎどうぞ歸したく思ひ、料理番へ話しかければ、料理番「もし花魁、それにはよい藥がござります、そのかはり壹分ござります」、女郎「歸りさへすれば幾らでもいゝわな」料理番「そんなら」と煮花をこしらひ、懷中より粉藥を出し煮花へ入れ飲ませる。客急に用事を思ひ出し歸りければちきさま跡へかの色男來り、女郎やれ嬉しやと思ひ、色男急に「歸らう」といへば、女郎南無三と又料理番へ話す。料理番「そんなら留めてやりやせう、留めるのは廿分でござります」女郎「そりや留まりさへすれば幾らでもいゝわな」料理番「そんなら」と又懷中より粉藥を出し例の如く飲ませければ、色男首をひねつて「いゝや今日でなく」といへば、女郎嬉しく思ひ「ほんに奇妙な藥だ、ありやアまア何といふ藥だ。歸したのは何でありんす」料理番「歸したのかえ、ありや棕櫚帶の黒燒さ」女郎「そして留めたのは」料理番「留めたのかえ、ありや何さ、朝比奈の黒燒さ」

寛政十一年刊「市川評判圖會」

棕櫚帶の黒燒が好かぬ客人を早退せしめたといふ小理窟は、箒にまつはる俗信から想到したことに相違あるまい。箒がかかる魔力を有するに至つた民俗的根據はどこにあるのか。箒を手拭で類冠りにして逆さに立て、おく、その説明のひとつ／＼に私たちは



A

ふ拾に街
坡九木鈴

横丁の古本屋で。親爺曰く「改造」は餘りお高く頂けません。お氣の毒ですが斯ういふものは殆ど出ませんので「野球界」か何かならもつと値良く頂きます。そこで私は止むを得ず誠にお氣の毒な顔になり乍ら、二、三日前に買った許りの「改造」を親爺に渡して何がしかの金を受取つたのである。その日から店先に半年許り前の「野球界」と一諸にまだインキの香も新らしい「改造」が金二十錢也の正札でならべられてゐたことは言ふ迄もない。然し考へてみると私は時局的綜合雜誌の古いのをいくら定價より遙かに安いとは言へ今更ら買つて讀まうとは思はないから、これはどうにも値良く頂けないのは判るが、古い「野球界」を買つて既に優勝チームの決つた「六大學リーグ戦の豫想」

多くの示唆を享受し深い考證を培養せねばならぬ。「手拭」だとか「頬冠り」だとか「逆さ」とかいふ個別的な名詞のうへに立つてもこれを究明してゆく。たゞ私は箒の本來の使命たる塵を拂ふ掃除するひとつの道具に根本的釋明の鍵があるのではあるまいかと思つてゐる。「手拭」「頬冠り」「逆さ」は説明好きな世間人が寄つてたかつてこれに結びつけ、民間信仰の道程をこせこせとまことしやかな秘密を藏せしめて、それが時代の推移の通過にまらびつゝめぐり來つたそのまゝの混血兒であるのか。

正月三日間は掃くものではないといふ。新年を壽ぐ習慣は日本人のもつ國民性を表現し、然して日本人自らの誇りとして育てられてきた。その正月の三日間は物を掃き出すことに禁忌した培ひが、根深く私たちのこゝろに浸透してゐてくれる。

箒持つ下女は叱られ初を
し
元日は夢と箒に用はなし
(古川柳)
元日の塵はつまんで捨て
られる
(古川柳)
はき溜の土地も掃きやむ
三ヶ日
(古川柳)
溜まつたまゝで元日の塵
(古川柳)

新しい年を迎へたこの日の家のもつすべてが瑞祥に充ち溢れることに嬉しさを感じるからには、物を掃き出す仕事の家庭的な日常性がこゝでぼつんと意識せられることによつて、あゝ今日はお正月だといふ氣持がゆつくりした團圓のうちから思ひ合せられ、もつたないお正月氣分にひたうではないかとのこゝろが湧いてくるのであつた。「元日に掃除をする」と金が入らぬのもこの感念に根ざすものであり、元日乃至三ヶ日は何ごともそのまゝでありたい氣分を強調したがつたのであらう

元日だ泣くなといふに女の子
(五健)
元日に泣くは七歳未満なり
(古川柳)
お元日早々泣聲をたてられ
ては何だか氣分を毀される
所謂縁起をいひたくなるので
ある。年中泣顔で暮すことに
なるのか知らず、不吉な感じ
に訴へられる。箒で掃くとい
ひ、泣聲をたてるといひ、こ
れを嫌ふのは所詮新年の壽ほ
ぎを賞でる意からであつて、
誰ひとり掃くとも見え
けさの春
のおちついた風景をたのし
むのであつた。臺灣では元日
には箒の神も休むから掃除す
るものではないといはれるが

Sato Special Klinik

呼吸器病科

内科

診療

加藤謙一

佐多愛彦

螺良四郎

電話 1151

院醫多佐

四八二八電 西北島堂成大

内地と同じ氣持を含んでゐるわけだ。

長尾客を早く退けるために箒に手拭で頬冠りをさせ逆さに立て呪ふのは、抑も前述の習俗を轉換させ活用したものに違ひないと思ふ。葬式の出た跡を掃くのもこの意であり死神を拂つてその災厄を免れようとするのである。長尾客を拂ふために箒といふよい道具を見つけて呪ふのであつて自分の嫌惡してゐるもの、氣分を新たにしたいとき、掃くといふことによつてこれをうちかはらひさつぱりとする。かう私は見てゐる。

長ツ尻の人の下駄に灸を据ゑると不思議に歸つてしまふといはれる。

履物に灸も据ゑられぬと高尾

(古川柳)
嫌はれた伊達政宗も可哀想だ。高尾太夫が伊達の太守の

履物に灸をするて早く歸せうとするが伽羅なので火をつければ香ふから躊躇する。

「迷信と川柳座談會」のなかで澤田四郎博士が、盗人自ら大便をしそれを盥で伏せて湯毛が長持ちする間中時間たつぷり悠々仕事をする禁厭がある旨を述べられてゐる。私は幼い頃、盥と主人の履物は夜になつたら一應家のなかに入れておく、盗人が大便をし盥を伏せその上に主人の履物を載せられると、主人は尙更家内中熟睡からのがれず、盗人の仕事を進捗させるのみに役立つからだと戒しめられ、そう話して私の母はそつと後の障子のがた／＼風に動く音を振返りながら私をねめつてたものだ。

「嬉遊笑覽」に、手洗を夜家の中にふせ置は盗賊來らずと(三〇頁へ續く)

などと言ふ記事を読む氣にもなれない。しかも「野球界」の方は値良く頂けるのださうである。これも私には判つたやうで判らない話である。

B

盛り場のスポーツランドで。そこには勿論射的や玉轉がしや其他の娯樂施設が完備してゐるのであるが、この頃そこへ新しくピンポン台が設けられてこれが又大變な繁昌振りである。むべなるかな世は擧げて體位向上の時代であるから、夜ともなればその日の仕事から解放されたサラリーマン氏や商店の番頭氏、小僧さんさてはどこかの事務員らしき若い女性達が白い小さなボールを追つて、嬉々として汗を流してゐる。硝子戸の外から眺めてみると、それはまるで水族館の水槽の中を黒い大鯨やあるひはスマートな若鮐が樂しげに泳ぎ廻つてゐるかの様に見えるのだが、然しそれはまあどうでも良いとして、最近の若い女性が殆ど例外なく健康さうな胸を張つて潑刺として働いてゐるのを見受ける時、私はこのスポーツランドの大將もさしづめ厚生省あたりから大いにお褒めに預つても良いと思ふので



川柳劇

本脚のめたの組隣お

康健るなかるは

(場一)

朗由自畑小

人物

松吉 (三十三)

妻 竹子 (二十五)

指物職人 梅吉 (三十五)

舞臺は松吉の職場、出来上つた水屋や下駄箱が置かれて在り、松吉は木を削つて居る、竹子は棚元で晝の支度にいそがわしげに、大根を刻んで居る。

松吉 おい、まだ晝飯にはありつけぬのかい。

竹子 あら、あんたおなかがい空いてんの。

松吉 何をツ。

竹子 ほつ／＼、もうそんな時間かしら、(と時計を見上げる。十二時を打つ) あら。

松吉 さまあ見ろ。

竹子 ほつ／＼、すみません。

松吉 ちえツ、こたえねエな(と木を削り乍ら唄ふ)見よ東海の空明けてエ。

竹子 (大根を刻み乍ら) 旭日高く輝けばア(と唄ひ乍ら) あ痛ツ。(と手をさる)

松吉 馬鹿野郎。

竹子 だつて、痛いわよオ。

松吉 仕様がねエな。(と腰の箕入れから、煙草をつまんで) さあ、この煙草をつけるときやあすぐ癒るんだ。(と塗る)

竹子 イタアイツ！。

松吉 子供ぢやあるめいし、大ぎような聲を出すな。

竹子 だつて、(と顔をしかめる)

松吉(紙でく／＼り乍ら) 良薬は口に苦し、いや、えーと。

(と考へる)

竹子 そんなこと、どうでもいいぢやないの。早くく／＼つてよ。

松吉 さうだ、まあいいや、(とく／＼つて) だいたいなん

んだよ、晝飯の菜にさ、大

根なんか喰はせ様つて、けちな了見だから、ろくなこたあねエんだ。

竹子 でも。

松吉 節約つてことを知らねエかと来るんだらう。

竹子 さうよ。

松吉 次が戦地の兵隊さんのことを思えばと、斬り込んで来るつもりだらう。

竹子 勿論さうぢやないの。

松吉 わかつた。

竹子 ねエ。

松吉 だつたら、俺の晩酌の二合を、せめて一合につて云ひ度ひんだらう。

竹子 いゝえ。

松吉 はつ／＼、おめいもそこまではけちな了見でねエつて云うんだな、話せるよ。

竹子 どう致しまして、一合なんてけちなことを云はずに、絶対禁酒してほしいの

松吉 何をツ。

竹子 ねエ。

松吉 うるせい。(と大根を刻み始める) いてえツ！(と手を切る)

竹子 ほら、罰よ。

松吉 ちくしよツ。

松吉 俺あは、そんなもの塗たくらなくつたつて、直ぐ癒るんだよ。

竹子 御冗談でせう。(と塗る)

松吉 いていッ。

竹子 ほつ／＼、ひとの振り見て吾振り直せつて、いや、どうだつたかしら。

松吉 馬鹿野郎、ひとをつめてつて吾身の痛さを知れた。

竹子 いゝえ、それともちよつと違ふ様よ。こをつと、何んだつけ。(と考へる)

松吉 そんなことあどうでもいゝぢやねエか、早く引つく／＼つまはねエか。

竹子 あらすみません。(とく／＼始める。梅吉が、へべれけに成つてやつて来る)

梅吉 うわーい御兩人。

竹子 あらッ。

松吉 なあーんだい、梅さんぢやねエか。

梅吉 へつ／＼、ひるまつばかり、手に手を取つていちや／＼と、見ちやあ居られねエや。

松吉 ちえツ。

竹子 おかしくつて。(と、つんとして大根を刻み始める)

梅吉 そんなものかねエ、へつ／＼。

松吉 と云やあ、お前こそ、ひるまつばかり、職域奉公

小なさバツド



麻生アト

ある。尤も向ふに言はせれば一時間二十錢也の料金でどうにもやり切れないほど儲かつてゐるのかも知れないことを思ふと、別にそんな御心配は御無用だと仰有るかも知れないが。

其時の私は、怎のやうな用件を携へてゐたものか。亦、何時の頃から、其町を彷徨してゐたものか。兎に角せつせと、途を急いでゐた事は事實だつた。
日が暮れやうと云ふのか。或は、未だ明けきつてゐないのか。仄暗い或種の色彩が、不氣味な水脈のやうに、足許を流れて、歩行は極めて難澁であつた。
途は、埃々とした路次のやうな徑で、家と謂つても、見下せるかと思ふ程に低い屋根を、ゴタゴタと行儀悪く並べてゐて。其處には、目も當てられぬ生活や、人間一と謂ふよりも、人類の、生物の、賤

も打つちやらかして、いゝ氣
嫌すぎるぢやねエか。

梅吉 へつ／＼、これ所
謂、つまり、軍需景氣つて
いふ奴さ。(と百圓札を取出
して) 參考迄に見ておきな。

が、何日の間に熟練工さん
におなりなすつたの。

梅吉 さあそこだよ。

松吉 近頃、いくら鐵不足だ
からつて、滿更木でも鐵砲
玉を作れめいしさ。

梅吉 ぢよ、冗談ぢやねエ。

松吉 それぢやおめい、そん
な工場で、何の役に立つて
居るんだい。

梅吉 されば物も使用つて
云う奴でよ、金氣ばかりの
工場でも、やつぱり荷造り
つていう役目があらあな。

松吉 なゝる程、そいつあ
下駄箱職人のおめいには打つ
てつくだ。

梅吉 ちえツ。

竹子 それで、あんたの其の
下駄箱、いえ、あの。

梅吉 知りませんよ。

竹子 ほつ／＼、でも、
其の。

梅吉 下駄箱でムンせう。

竹子 いえ、荷箱へ、何を詰
込むんですの。

梅吉 そいつあ云はれねエよ
松吉 云はれねエ?

梅吉 さうよ、時節柄、軍需
工場の内暮はあんまりくわ
しく聞いておもらひしたか
あねエんだ。

松吉 成程。

梅吉 はつ／＼、冷飯仲
間のおめい。

松吉 御冗談でせう。

梅吉 はつ／＼、ぢやあ
呑み仲間のおめいにも。

松吉 さう來なくつちやあな
らねエ。

梅吉 働いて居る工場の内輪
をかくし立するなんて、水
臭い様だが。

松吉 なあに。

梅吉 これもお國の爲だ。

竹子 お國の爲つてば、御出
征しなすつた弟さん。

梅吉 あゝさう／＼、其節は
どうも。(と改まつて頭を下げ
る)

松吉 いやあ。(と頭を下げ返
えて) それからもう半歳
にもなるかな。

梅吉 早えもんだ、もうちや
あんと、佛領印度支那つて
云ふとうほうもねエところ
へ行つてやがるんだ。

松吉 ほう、佛印だね。

梅吉 此の間、ふんどし一つ
で泥んこになつて、橋の架
替えをやつて居やがるのを
ニュース映畫で見て、すつ
かり泣かされちやつたよ。

竹子 まあ、弟さんが、ニ
ュース映畫に出て居なすつた
んですか。

梅吉 いや、弟ぢやねエが、
弟と同じ工兵隊だつたから
身につまされたつていふ譯
さ。

竹子 さう。

松吉 それで、弟も元氣なん
かい。

梅吉 有難度う、其れを心配
して居たんだが、今日、半
歳振りに手紙を寄起しよつ
てさ、張り切つてやつて居
るからつてよ。

松吉 さうかい、そいつあ結
構だ。

梅吉 おめいにもよろしくつ
て、(と、ふところをもさぐり
乍ら) あツ、おめいにも見
てもらおうと思つて持つて
來たのに、しまつた。

竹子 どうなすつたの。

梅吉 其手紙、どつかい、お
つことしてしまつたらしい
んだ。

松吉 仕様がねエな。

梅吉 はつ／＼、話にならね
エ、まゝいゝや、悪い便り
ぢやねエんだから、それで
よ、弟の健康を祝してつて
いふ奴で、一つべいおごら
してもらおうと思つてよ。

松吉 はつ／＼、さうか
い、それならまあ上りねエ。

竹子 まあ現金ねエ。

梅吉 はつ／＼、昔から
此奴はこんな奴でさ、とこ
ろで、おめい(と竹子へ氣兼
する様に)出られねエのかい
松吉 出ろつて。

梅吉 しいツ。

松吉 しいツ。

梅吉 しいツ。

松吉 しいツ。

梅吉 しいツ。

松吉 しいツ。

梅吉 しいツ。

松吉 しいツ。

梅吉 しいツ。

松吉 しいツ。

梅吉 しいツ。

松吉 しいツ。

梅吉 しいツ。

松吉 しいツ。

梅吉 しいツ。

松吉 しいツ。

梅吉 しいツ。

松吉 しいツ。

梅吉 しいツ。

松吉 しいツ。

梅吉 しいツ。

松吉 しいツ。

ましい媚態が、數を極めて横
はつてゐた。

私は、一時も早く、この厭
な處から、抜けて出たいと念
じながら、不知ず不識ずに、
歩調を速めたが、遂に、周囲
には何の變相もなく、私自
身の焦燥を、掻きたて掻きた
て、不穩の底深く打ち沈めて
行つた。

然し、その時。貧民窟の軒
並にも、一齊に灯が點つたの
で、この仄暗いのは、日が、
暮れてゆくのだと判つた。そ
して——點つた灯は、却つて
哀愁を呼んだ。

ルービヒサア

大日本製薬株式会社

松吉 出たつておめい、五時迄は、どこへ行つたつて酒にもありつけねえし、仕様がねえちやねえか。

梅吉 ちよいとお耳を。

松吉 なある程。

(竹子、つんとして、棚元へ引返えして大根を刻み始める。)

梅吉 へつへつへつ、計畫は密なるをとね。

松吉 おいッ、お竹。

竹子 あいよ。

松吉 着物を出しな。

竹子 出かけるんですか。

梅吉 へつへつへつ、なあにちよいとね。へつへつへつ、ほんのちよつぱりとね、なにしろ、お國の爲に、命懸で働いて居る、弟の野郎の爲に、健康を祝してやろうつていうんですからね、へつへつへつ、今日だけは目に見ておもらひしていいだ。

竹子 さう、でも、あなた等二人でお酒を呑んで、それで弟さんの、マラリヤの豫防にでもなるのかしら。

梅吉 えい。

竹子 ねえ梅さん。

梅吉 はあ。

竹子 ねえあんた。

松吉 うるせい。

竹子 それよりか、其の大枚のお金の幾分でも、弟さんへ直接、罐詰のお酒でも送つてあげた方が、よつぽど健康が祝せるんぢやないかしら。

梅吉 な、成程、そいつ無理窟だ、俺い等が呑むより、そ、そりやあ、たしかにね

松吉 はつへつへつ、兵隊はああの若い奴にはかなわねえ。

梅吉 全く。

竹子 ひどいわ。

梅吉 はつへつへつ、いや、わかつた、(と立上つて)ちやあ思立つたが吉日だ。

松吉 慰問袋つていうことにするか。

梅吉 うん、この百圓で、うんと仕込んで送つてやるか。

松吉 よからう。

梅吉 ぢやあ、買込みに行くんだ、一諸につき合つてく

松吉 よし來た。(と一諸に行きかける)

竹子 お前さん。(と、其れをおさへる)

梅吉 信用がねえな。

(三人思はず爆笑の内に)

(幕)

狂歌の話

マラリヤ蚊に御注意

みめ(三目)よきは夫の爲のふため(二目)なり女房は家のかため(片目)なりけり

といふ狂歌は、隻眼の妻が夫の虐待に堪え兼ねた時に詠んだもの

つじ妻も合せばなどか合せらんうちは表にまかせおく身ぞ



といふのは嫉妬喧嘩の絶えない女房へある狂歌師が贈つたものだが歌の功德で夫の行状も改まり、嫉妬喧嘩はおさまつたといふ小町や其角のお株を奪つたメイ歌ださうで、また狂歌師四方赤良の放蕩を諷めた妻の狂歌

飛鳥川内は野となれ山櫻散らずは寝(根)には歸らざらまし

など相當のものだが實効的にはあまり反響がなかつたといふから、狂歌

などといふものは餘り秀逸作よりも佳作の次席位がよいのかも知れませ

ん。秀逸でなければいけないものには夏の夜に付きもの蚊やりです。

これはどうしても雞のマークで有名

な金鳥蚊とり線香の特許製

品でなければ世間が治まらぬと云ふもの

で、殊に近年大陸方面との交通が頻繁に

成つてから、マラリヤ蚊と

云つて大變怖れられてゐるアノフェレスも、都會の周圍國には相當入り込んでゐる様ですから、今夏は餘程

御注意が肝要と云はねばなりません

い。(廣告)

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

* * * * *

著郎路生麻

釋評柳川新

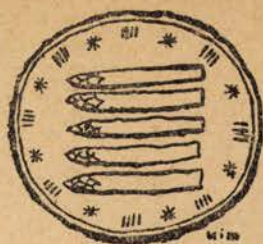
笑咲と笑苦=強勉生人て

地番二八一丁二通岸海島出市堺

洞 朽 不 所行發

番二九三〇三阪大替振

送 料 六 錢
☆海外註文は送料
實費加算を乞ふ



隨想

文字のいたづら

小山文三

に書いて與へた文句に、

觀無量壽經曰 尊者當留那

と言ふ一軸がある。損ジヤ振

ルナ」と讀むらしい。

これは酒落を通り越した痛烈な皮肉である。

○ 東京城や南京城は支那事變

この方、トンキン城、ナンキン城と讀み度くなるが、ほん

とうは朝鮮の京城の東京城驛

南京城驛を指すのである。

中學校の地理の先生も地名

を教へるのに隨分苦勞が多いらしい。

○ 幅知山線に柏原驛がある。

關西線には柏原驛がある。大

分縣では柏原、福島縣では柏原と呼ぶのである。

○ 長野縣に戸倉あり、宮城縣と愛知縣に戸倉がある。同じ

文字でも讀み方に濁點の有無があるからやゝこしい。

○ 京都府乙訓郡だの、北海道の長萬部なんか知らない人で

は電報が打てぬらしい。

○ 秩父丸は新日本式ローマ綴

でアメリカ式スラングに於て

女性の或部分を意味するので

録倉丸と改稱したと云ふ事である。

○ 帝國ホテルのローマ綴を佛

蘭西人が讀むと女房の不義を

意味するらしい。

○ 幡州名所廻りの石の寶殿も

ローマ綴では問題になるらしい。

○ 自主的外交——日本精神の

強調さるゝ此時世に今更改稱

でもあるまいと思ふ。

○ 東京に遊學中の息子から田

舎の親父に、

カネオクレタノム

の電報を打つて學資の送金を

督促した。

之に對して田舎の親父から、

ダレガクレタ ノマズニ

タメヨ

との返信が着いたと言ふ話がある。

○ 近頃東京の學童の間に中の

字の上を取つた甲を平重盛と

讀む事が流行つてゐる。

○ 中ならんと欲すれば甲なら

ず、甲ならんと欲すれば中

ならず。

○ だ、とは少々こぢつけないながら

隨分考へたものである。

○ 近松門左衛門が京都の珠數

屋の主人に

二ツニオリテクビニカケ

ル珠數

を注文したのに、京都からは

首に掛ける大きな珠數が届いたの

で、

○ 誂へたのは手首に掛ける

小さい珠數

だからとて、突返したと言ふ

話もある。

○ これなどは全部、假名書きに

したら、全くまごつくに違ひ

ない。

○ 假名遣ひとテニオハは隨分

厄介な問題が多いのである。

○ アスルスバンニコイとの電

報が來たので、當日晩に恐る

ゝ元の主人を尋ねたところ

君、濟まないが、明日、

留守番に來て呉れないか

との御託宣に、出入りの男も

目を白黒させて、全く電文の

讀み違ひだつた事に氣がつい

たと云ふ話もある。

○ こんなのは、留守番と、留

覺へる。

○ 守、晩とを勘違ひした一例に

過ぎないが、兎も角も假名遣

ひのむつかしい事が適切に判

るのである。

お時間の少ない方には最も便利で
直ぐお役に立つ

職業洋裁自由教室

(大阪市南區饅谷西ノ町十)

教授 は山中吉子先生のヴァレンタイ
ンシステムで御指導

教材 は初歩の方は御持参の事、但し
新しい生地でなくとも結構、研究の足
りた御上手な方にはブルーの店から
教材をお渡しいたします。又相當の
報酬も差上げます。

卒業 は6ヶ月(60回以上出席の方に
は美麗な卒業證書を贈呈)

教授料 は月謝制と切符制の二種
申込・出席券 其他御問合せは下記へ

ブルブルー洋装店

大阪市南區心齋橋一丁目四四
を ご う 北 横

○ 昔の歌讀みは隨分文字のい
たづらを試みてゐる。

○ 「月月に月見る月は多けれ
ど……」の歌は申すもがな、
これに似たのが澤山ある。

○ 人多人の中にも人ぞなき
人になれ人 人になせ人
人にして人を知らざる人多
し 人の言葉を學べ人
心こそ心迷はず心なれ
心に心 心許すな

○ よき人のよしとよく見て
よしと云ひし よしのよく
見よ よき人よ君

○ こんなのを集めて見ると、や
ゝこしくて頭が痛くなるのを
覺へる。



松岡外相と
川柳
福田山雨樓

松岡外相は四月二十二日帝都へ晴れの歸朝をされた。新聞の傳ふところによると、外相は今回の旅行中その肩書をサリと流して「俳人不息」に還元して、四十餘日の行脚中に得た俳句の作品は百五十句（内半分は大連からの歸路詠まれたもの）もあると云ふことだ。

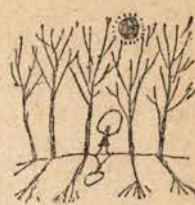
あゝ祖國祖國の山河春の色
歸り路や何と云ふても不二の山
歸り路箱根越しけり雪の中
旅終へて皇都に入るや涙なり

外相は官邸で「スフ入りちやよ」とゴ披露に及べれたので、讀賣新聞などは「俳人外相のスフ名句」との見出で紹介してゐる。又長谷川秘書官が俳人松岡さんの句藁から披露された中には

（内地に第一歩を印して）
訪歐の旅よりかへる雁が鳴く

（六週間の旅を狂句として）
旅稼ぎすませて歸る松岡座と云ふのもある。尙この外に短歌の收獲もあるらしく、「國防教育」と云ふ雑誌の五月

第一號には「訪歐歌日記」を執筆してゐられる。
それは兎も角、松岡さんの句がかなり拙くて、寧ろ滑稽をすら催すほどの代物である川柳の方がわかるのではない



同舟近詠

金澤 安川久留美

鉢蘭のつゝへ敷の手となりぬ
鈴蘭の花鼻の利かぬは馬に似る
藤の花まだ新しい地蔵の眼
洋傘をしやばんで拭けば五月晴
桐の花勤勞奉仕の土へ落ち

懐ろ手すれば狸に似て居ます
萬緑の中へゴーンと撞いて佇ち
私慾など無いと云ひきるのを嗤ふ
美辭麗句さりとて勝手多過る

中譯け程は置てる軒の砂
落魄の一家にをしい姉妹
手相見の餘得女の手も握り
嫁き遅れレベルを下げて又遅れ

春の海なぎさに足を濡らすまで
新緑へ机の位置を二度替える
麥うれて里子にやつた子を想ひ
千人針子供も荷物を預つて

かとも想像される。
松岡さんが句の拙いのはそれでいいと思ふ。松岡さんに俳句の上達を望みたくはない。それよりも、市井から、

赤ん坊の手に怒りなど消え去つた

松江 勝谷山川兒

妻侍る方へ煙草の煙流れ
愛の巢へ國から届く古き軸
類の字を逆さに眺め飯を待ち
知事閣下鉛筆一本あればよし
ハイキング脳病院の前に行く

神戸 潮田明坊

家族數みとめて呉れず百目だけ
さし下駄の音せはしなく料理人
家政婦のほどこけ割烹着だけが出る
遊學の第二信から金のこと

長野縣 高峰柳兒

夕立へ白痴一人が忘れられ
親として結婚適令期にあせり
新任の飲ける噂がすでに洩れ

奈良縣 嶋田翠峯

母親は嚙んで含めてまた諭し
病院の窓に喜憂のありくと

名古屋 鈴木可香

憂ひある日の白き薔薇匂ひすぎ
一番に手をあげる子の眉太し
丸腰の朝の巡査ヘラデオ鳴る

山口縣 三原狂路

風の吹く譯を聞く子の憎らしく
そんな所に咲くから蝶に忘れられ
本日休業あれで煙草屋食ふてゆけ



蕎 麥 ・ 酒

蛭 子 省 一

「御馳走」とは、副食物の多い事を意味するやうになり、米の飯の味を忘れかけた時に麥や粟や外米と抱合せを強制され、今更の如くに世間が騒ぎたてて居る中を、私は旅で行く先々、の食膳が心待たれる興味であつた。努めて代用食の試食をした。

須磨は憧憬の地、萍花國手と初對面の挨拶もそこ、容態を訴へて數日分の匙加減を願ふ。腹工合が悪くは食ふが無筆の旅日記ともならぬからだ。松風村雨の墓や須磨寺に。敦盛塚にも詣づ。十六の美少年の塔として大きい高一丈一尺墓石方四尺。それもその筈、北條貞時が平家一門の供養に建立したもの、「あつめ塚」の義であると云ふ。塚への曲り角に一軒の茶店がある。「蕎麥はあつ盛、あん

ばいはよし經、大茶碗にてつ

拐山もり、それを知りつつく
らふ判官……酒は一の谷源平
つゝぢのものはく……水は帆
かけ舟、紀州熊野浦までやり
つばなし……」の敦盛蕎麥を
名物としてゐた。人云ふ名物
に旨いものなしと。だからで
もなからうが、とうの昔から
賣つてゐない。時節柄だ。一
工夫あつて復活が望ましい。

やりつばなしの風光を賞愛す
るには、腰を下ろす名物と名
のつくものが欲しいではない
か。

信濃ではノレンに偽のない
「蕎麥」で足するの、どこへ
行つても「手打生そば」と染め
ぬく、理屈を云へばツナギは
交るのだが、「おらがそば」の
面目にかけてもの事だ。安代
温泉玄々閣の三階で原稿書き
をして居ると、前の蕎麥屋か

ら十一時になれば必ず棒の音
が聞え、それが裏の山に反響
する。洵に浴客気分をそゝる
ものである。私は時をはかつ
てノレンをくぐる。晝の代用
食である。訪ねて下さつた東
京の阿部佐保蘭さんも此店に
案内する。丁度一本分だけ残
つてゐたので盃をあげ初對面
の交驛をしたが、地酒の並等
酒なのだらう。でも君は三四
杯でホンノリとして呉れられ
た。

東京にはいつた日、深大寺
の側を通つた。人家が櫛比し
たものだ。『棒の手を馳走に
みせる深大寺』の面影が、ま
だ少し残つて居ると聞き嬉れ
しく思つた。此古句の「馳走」
の二字こそは、代用食時代に
於て一層嬉れしい穿ちだ。上
京中のSさんが、蕎麥を食べ
ねば歸阪されぬと言はるゝの
で、四人連で箸を採つた。こ
れが所謂東京の「生」そばだ。

「生蕎麥」なる言葉は古川柳に
はない。勿論信濃の上にたゝ
ん事難し。よし「俳諧とそば
くふ腹は江戸ぞかし」(古句)
と詠むと雖も、蕎麥切誹諧は
都の土地に應ぜずとて一生請
合申さずとかや(雲鈴)である
兎まれ「米のなる木を知らぬ」
との俚語には、研究すべき傳

説があるのに、都の川柳家に
は蕎麥の花盛りを知らぬ人は
ザラに有る。一翁は現代川柳
を「そば屋川柳」と評す。そば
屋の二階許りで句會を催すか
らのみではない。其源を究め
ず、交り氣
の多い「生
そば」通り
の川柳であ
るからだ。

京都では、
「そばぼろ」
の看板の
あがつて居
る河童屋の
句會に招か
れた。ザル
もたべた。

私は今、
病中の馳走
に安代温泉
から求め歸
へつた蕎麥
粉でそば搔
きをして居
る。風味鼻
より入つて
脳を衝く。
これに越す
ものはなか
らう。蕎麥
の産地では
そば搔きを

以て常食としたものだ。適當
の器具が手近にないので、抹
茶碗を用ひて居る。麥飯で
も外米飯でも、盛る器を選考
したならば、十分嗜好を加へ
得ると思ふ。流石に信州では

化膿症

齒槽膿瘍
齒齦炎
中耳炎
蓄膿症
扁桃腺炎
丹毒・濕疹
トラホーム
錠

内服により化膿菌
を殺滅し、根原
に短期に治癒を促
進する。
廿錠五十錠百錠

元賣發造興

販大 會商品藥内之山 京東

蕎麥掻き茶碗が焼かれてある佐久間象山で名ある松代の窯などで焼いたもの、鐵鉢型、鼠地に青黒色の釉がたつぶり垂れて居る野趣ある民藝風。「風俗文選」には蕎麥切頰に次で酒徳頰がある。私の話も一筆酒に及ぼしたい。私は聊か酒造る業に關係があるからいたく酒を愛惜する。飲んで微酔、此中大に佳趣あり、若し酩酊に至らば便ち惡境を成すもの、亂醉泥醉者を嫌ふ。私は一日二食、一食二碗の慣習が自らつき、微酔すれば一碗ですむ。この場合酒は一碗の代用食となり榮養に事缺かぬ。學者の説によれば、血液中のアルコール量が〇・二パーセントになつた時がほろ酔ひの上機嫌で〇・三パーセントとなると酩酊態度が極めて明白になる。ほろ酔ひになるには體重七〇斤の人が空腹時に四合五勺位呷ればよいと、これは試験管内の話であつて私は四合五勺の三分の一でも多過ぎる。本誌上連載「武玉川研究」の指導者梅本廬山翁は長年晩食はとられず八勺の酒を以て代用とされ、『八十の翁となれど氣ばかりは十八歳の春に變らず』と今年頭の御感想である。昨夏私は下谷の

書齋に親しく翁と對談し、嬰鑠として考證の筆を捨てられぬのに感嘆し敬服した。爰に於て、酒を代用食となす者にのみ眞の醍醐味がわかるのであると一本打込むで置く。尙ほ「元來酒菜と云ふのは後世の事なり、今は酒菜數品奢慢なる事を知るべし」(司馬漢江)で、サカナに依存せずんば味はへぬやうでは、未だ酒を談するに足らず。酒呑には一汁一菜も贅となる。難の「菊正宗」の蔵を見學し所謂吟醸を呷き後は爛をして御馳走になつた。微醺の不朽洞御主人は上々吉の機嫌で風懷を談ぜらる。歸途西宮のエビスさんにお詣りして賽銭を投げ、「白鹿」の宮水の井戸のぞきをした。

【追記】この稿をかき餘程経つてから「旅」誌昭和十五年七月號をみると、小野燕子氏が「信越の味覺」を寄せて居られ、『信州の蕎麥はよろしいが汁がわるい鬼汁などといつて土地のもので造つた方がまだよいが汁の出汁はまづい』と。いかにも同感ではあるが、これは東京人などが入り込み、色々小言や註文をするので、都會マガイ化しつつある過程だからだ。土地には土地の味がある。信州丸出しが一番よい。少くとも一所に一ヶ月は滞在し風土に馴れて、始めて眞の味覺を評し得べしと思ふ。『蕎



募集句

一路集

代用食 山雨樓選

代用食未だまだ喰へる有難さ
時間外代用食の江戸にぎり
サイレンへうどん・馴れ箸を出し
佛壇へ桃と代用食並び
代用食やたらに素を入れたがり
空閑地代用食が芽を出した
代用へ一そうれしいウドン好き
新妻の工夫かしこき代用食
長くも高粱食を召し給ひ
母の智慧代用食に強く見せ
代用食子供等箸にさして食べ
代用食へ新妻智慧のありつたけ
ウインドの代用食を見て歸り
代用の餅には惜しい烏賊が載り
作業着のまゝへおいしい代用食
犬と下女代用食ですます晝
代用食客から智慧を借りて出来
氣の置けぬ客で代用食を出し
晝食はうどん出勤荷が輕し
代用食母に久しい髪の艶
代用食へ支那の疲れを見せる人
翼賛を論じ代用食の晝餉
代用食智慧は女房にまかしとき
代用食戰況ニュースが聞えて來
代用食カロリー表が貼つてあり
芋侍と云はれた先祖からの芋

笑々 恒明 六龍 ユリエ 彌生 牛歩 十四之 保人 石鹿 葉光 勿來 美奈子 一龜 千斗 抱逸 茂路 市多樓 芳郎 みづほ 風來子 同 詩朗 九柳 眞理子 同 勝二

純綿 夕鐘選

純綿を疑ひ一寸買ひ流る
手織縞母の遺品をなつかしみ
雨に合ひ又純綿の話が出
おむつ未だ人絹でない洗ひやう
純綿を着せて金屏納はれる
初湯する子へ純綿のタオル出し
純綿に金の糸目がない世相
純綿の質屋の流れ買つて來る
純綿と言へば女の眼が光り
純綿のよだれ掛した地藏さん
純綿だらうかと織維ひつばつて
純綿の小倉つぶした足袋が出來
純綿が少し光つて怪しまれ
純綿の大風呂敷の色褪せて

恩給の鉢へ代用食が合ひ
代用食説明付きで喰はされる
代用食大きな皿にほつとする
代用食小使室の湯氣うれし
(秀)待つベンチ代用食の腹鳴
(秀)代用食食堂の窓暗れてゐる
(秀)子とたまに來た食堂。芋の飯
(秀)小使も社長もうどん晝が済み
(秀)代用食榮養料理めいて來る
(人)代用食鍋一杯の子澤山
(人)縣知事の代用食は撮される
(地)馬鈴薯の花が花壇に咲く今年
(地)擦鉢の音に代用食は出來
(天)素麵だ芋だなんばだ喜ぶ子
(軸)代用食日露の役で食べた
文化映畫玉蜀黍の村を見る
(軸)石ころの村でなんばへ舌鼓

同 斗風 同 眞理子 勿來 みづほ ユリエ 神樂 芳郎 勝二 市多樓 勝二 山雨樓 同

勝守

▼本書は川柳きやり吟社の重鎮、故八十島勇魚氏の句集であり、巻頭に村田周魚氏の序がある。

▼内容年代を追うて、細格子（可喜津時代）、初不動（杜若時代）、勝守（勇魚時代）の三時

▼この種の刊行に際しては故
人の年譜を入れるべきではな
かつたか。

四六版一六七頁、非賣品、編輯者山川花戀坊、東京市豊島區高田本町二ノ一四六七、川柳きやり吟社發行。

代に分類、大正九年より昭和十四年七月までの作品を蒐録▼昭和十六年三月十五日發行

大阪市西區京町堀通り三丁目
電話土佐堀五一三〇番

花 花 供 生 造 裝
環 籠 花 花 花 飾



くれない

フロリスト

麥の粉に蕎麥の熾が加はつて居るから益々黒くなる。それも香ばしきとてよいかも知れぬが、切なきと打ち手に依ることが、大切な條件らしい」と。私は黒い程のものにまだ會はず、寧ろ白いのに驚いた。一昨日日松本在産れの友人が來られた際、その事を語つたら、近年アンカに白くしたのださうで、あれでなくては他方面に賣れぬによるとの事を歸郷して聞いたと。小野氏も深大寺に觸れ「この寺を中心にしないで今では神代村といふが、此土地の蕎麥粉は昔から有名だが都人は知らない」と。東京の川柳家で深大寺そばを知つての人が

稀なのだ。「長岡の山間地方」とれるマタタビとアンニンは清好の酒のさかなである……鹽漬にして年中越後地方にはある筈だ」と。木天蓼は山地に自生するので信州でも賞味し得る。果實のみならず若い葉も亦よろし信州の家庭製の味噌漬は、菓子土産物拂底の昨今、是非名物として擴めたいと進言してきた瓜の中を抜き紫蘇の葉をギツシリ詰め、三年五年或は十年も漬けたものになると風味は複雑だ。古川柳人が徒らに信州を惡ざまに詠んで居る不足の認識に對しては江戸の奴等が何に知るかであつた筈だ。「旅で家で」其の五

靴

啞三味選

満員車新調の靴氣にかゝり
新調の靴が氣になる満員車
靴音に耳をたてゝる臺所
靴代は入學祝と叔父が呉れ
靴ぬいで豆をいたはる大休止
整然と靴が竝んで客の聲
田舎から出て來たらしい靴の泥
石蹴つた證據に靴の先がはげ
また夏が來たウキンドの白い靴
金策に疲れた靴がペンチにゐ
何もせぬ所長の靴が光つてゐ
靴買つて採用通知待つてをり

平人
須惠夫
美奈子
彌生
芳郎
小城子
香林坊
晴美
ユリエ
帆船
抱一
迷路

(佳) 純綿の輸出日本の意氣を見せ
(佳) 純綿へ未練残さぬ迄にはき
(佳) 湯上りへ純綿と云ふ肌ざはり
(佳) 軽んじた純綿俄に大事がり
(佳) 純綿は無いものにして尊ばれ
(佳) 純綿は色褪せたまゝ繼つづのまゝ
(佳) 純綿が値打ちで未だ手放さず
(佳) 健やかな老に純綿重からず
(佳) 純綿の持物多く羨まれ
(佳) 純綿を着て母らしい後つき
(秀) 純綿のまだ有る故郷の住まゝみよし
(秀) 純綿を生かすに妻の忙しい
(秀) 純綿の魅力へ財布はたくなり
(秀) 古浴衣純綿と云ふ坐りやう
(秀) 純綿は平和な過去の姿にて
(人) 青空のもと純綿へ糊をつけ
(地) 純綿であつて欲しい運動靴
(天) 物干へ純綿と云ふ乾きやう
(軸) 大空の鯉純綿とる風を切り

鶴聲
茂路
みづほ
美奈子
ユリエ
平行
葉光
静子
同
斗風
秀潮
芳朗
風來子
ユリエ
美奈子
鶴聲
眞理子
夕鐘

御主人の参内を待つ靴の艶
靴下のたるみ地下鐵待つてゐる
靴音も遠慮して行く社長室
代用品の靴もやつぱり音を立て
蘇生した艶ではかれる古い靴
あの人も來てゐるさうな靴がある
一足の靴で無休の配達夫
靴音もさすが特命檢閲使
近道をして來たらしい靴の泥
片方の靴ひきずつて傷痕傷
豚皮の靴歸還した身にうれし
宵淺く靴が光つた鋪道の灯
靴音が合つてどちらも無言なり
靴をぬぐ間も待てぬ話なり
光らせた靴を描へて明日へ寝る
靴ぬぎへ珍客の泥ほつとかれ
靴の艶もう獨身の色でなし
軍靴コツコツ歩哨を月が慰める
青春へ朝な朝なの靴の艶
軍靴にま敵トーチカを踏越えて
日曜にはく靴のある若い人
靴音も漫々的で春を行く
靴だけは課長と同じので出社
靴底の破れに氣付く小休止
磨かれた靴へ新婚ひやかされ
宴會のある日赤靴穿いて出る
(佳)履けますと靴屋修繕士（氣な）
(佳)ゴム靴の配給がある人だかり
(佳)靴下のない兒の靴が破れてる
(佳)戦傷の足へ履かした靴重し
(佳)この靴で勤めた父へ感謝する
(人)長期戦ズツクの靴の子が達者
(地)看板は靴屋のまゝで巴焼
(天)革靴へまだ／＼履ける銀打

抱一 千斗 風 同 斗 愛鳩 眞理子 琴聲 同 六龍子 同 みづほ 芳泉 同 牛步 同 梅香 靜子 眞理子 詩朗 樹岡 愛鳩 斗風 千斗 抱一

(二頁より續く)

云ふこと何よりいへるか、「帝京景物略」不以小兒女衣置星月下曰く云々怕賊星照亦不置洗濯餘水爲夜游神飲馬也といへることあり不角の點の付合に、月かけも紙帳の内へよせつけず手洗も一味すりがまじなひ、とある。

盗人の糞を見てあるたち

(古川柳)

無念さは盗人の糞掃除す

(古川柳)

盗人の糞へこわん指を

さし

(春雨)

盗人の足跡へ灸をすゑれば

その盗人は足を病んで歩くことが出来なくなるといふ。

安い調伏足跡へ灸をすゑ

(古川柳)

果して盗人は足を病んで歩行不能になるものか、それを私は問ふことをせぬ。それは呪ひである。しかしせめてもの腹癒せとなつて僅かなあきらめをつけさせるなら至極面白い話と思はねばならぬ。そしてかうした民俗の根據を遡つて考究してゆくことも忘れてはならない。俗信が信ずるに足るものであるか、或ひは單なる迷信として斥けねばならぬものであるかを糾す端緒を求め、民間信仰の右か左かを判断することが現代人のよき常識であり、文化の意義も

自らこゝから出發せねばならぬと思ふ。生活の古典が私たちの身近にあることは正しいに相違なく、それを尊重する精神も尙更必要なのである。私たちの生活のうへにとりましく民俗の據つて發生したむかしに遡り、それを究明してよき現代生活の指針とすることが、文化への大きな再認識であらねばならぬのではあるまいか。(終)

川協の★

★★ページ★

▼大阪府下に於ける柳誌統合問題
題は二月初旬、府警察部特高検閱課から川柳雜誌社主幹麻生路郎氏に再度出頭を命ぜられ柳誌統合上、府下の柳誌に關して意見を聴取され二月十五日、番傘、昭和川柳、川柳春秋、赤煉瓦、天守閣、つるはし、川柳雜誌の七社へ出頭を命ぜられた。(當日川柳春秋は病氣の故を以て缺席し)のて、麻生路郎氏一同を代表し二誌を残すことを要請、超えて五月七日、六社に再び出頭を命ぜられ(つるはしは既に廢刊)横路主任より「川柳雜誌」は有保證新聞紙の營業誌として、「番傘」は同人誌として二誌を残すことを容認された。他は國策に沿ひ、次號をもつて統合又は廢刊することとなつた。

▼本協會理事長麻生路郎氏は今春來事務多忙が祟つて健康勝れず、今後一會員として協會のため努力したいとの理由で辭表を提出され、後任理事長は水谷鮎美氏が襲ふこととなつた。

▼水谷鮎美氏は新理事長就任と共に「前理事長麻生路郎氏は本協會の創立者であり、氏の熱烈なる川柳愛によつて始めて協會存在の意義があると思ふ。而も氏の遠大な抱負と、その實踐力とは多事多端の柳界にとつて愈々益々その盡瘁に俟たなければならぬので、川柳人協會を一段と強化する意味に於て、氏を會長に推薦し、不肯鮎美は會長の下にあつて理事長としての事務的方面に於て特に微力を盡したい」との懇望によつて、麻生路郎氏は熱意の結果會長を受諾され、本協會の強化に善處するやう誓約された。

▼大阪市電氣局川柳會創立大會は五月十三日午後六時より市電軍人會館樓上で開催された。參會者百二十餘名で、なか／＼の盛會。本社麻生路郎主幹の「秀句を詠味せよ」と題する講演があつた。

▼徐州川柳會創立句會は四月二十九日大同街居留民團體樓上に於て開催された。同會は徐州居留民會の前田紅夢樓氏と商工會

議所の安井ひろし氏(元川柳雜誌社同人)の斡旋で設立された。台中の横山勝二氏、高山武士氏、奈那里天歩氏等は四月十六日川柳研究會を開催された。



今日も又
銃後の清
き人の文
字
明

▼菊川泰平樂氏(鳳凰城)は五月十四日嚴島神社へ參拜され「ふるさと」は海の青きが眼にしみる」の句を寄せられた。

▼本庄快哉氏(松江)は五月七八・九日に岡山・大阪に旅行されて左の句を寄せられた。

「鶴みんな出て來い日本三公園」
「大坂城北海道からの子が並び」
岡崎祥月氏(松江)は四月末日目出度く華燭の典を挙げられた。

川柳人協會員に告ぐ

本協會機關誌として從來頒布いたしてゐました「川柳雜誌」は前理事長麻生路郎氏の好意により犧牲的特價で分譲されてゐたのであります。同誌が定價以上の原價で印刷されてゐる實狀

を知つてこのまゝ看過することが出来ないのを、せめて定價だけは支出していただくことに決定いたしました。従つて今後の協會費は半年分一圓八十錢一年分三圓六十錢です。六月からの會費拂込みは右によつていただきます。既にお拂込みの方は右

★久留美句畫雙第二回頒布會

北陸川柳協會にてはききに久留美句畫雙頒布會を催して第一回は盛況に賣切れとなつたが、今度はさらに同氏畫友沙郎氏、ト見氏(金澤)松の門氏(富山)等の助援のもとに第二回句畫雙頒布會を企て目下豫約募集するが、規定は一口五圓(紙表裝付)にて申込所は長町七ノ二同會又は長町七番丁野崎如月堂なりと一切は六月十五日限。

★製本は川柳人協會

サービス部で

雜誌の散逸をふせぐために合本をしたい／＼と思ひながら積み上げてゐる人達のため製本の勞をとります。御希望の方は下記へお知らせ下さい。大阪市西區江戸堀上通二丁目四六昭和ビル二〇一號室川柳人協會(電話土佐堀八一六三)

金額によつて換算繰上げることといたします。なほ其他の協會の費用は從來通り同氏の後援費其の他の寄附によることといたしました御諒承を請ふ。

昭和十六年五月廿六日

川柳人協會
理事長 水谷鮎美

柳望界

催

▼川柳雑誌社例會は五月三日午後六時から御津八幡宮に於て開催。▼松坂俱樂部廊生路郎川柳講座は五月四日午後一時、十八日午後一時。▼有恒俱樂部川柳講座は五月十日山科方面へ吟行夕刻より宇治観月橋畔澤で作句、二十一日午後六時より有恒俱樂部川柳講座。▼川柳雑誌社月評會は五月十二日午後六時よりサイタルに於て開く。▼住友親友會尼崎會は十六日夕刻より信交俱樂部で開催。▼阪大川柳會は二十日午後四時、阪大病院會議室に開催。▼堺支部會は五月十六日午後七時から橋本波夢造氏邸で開催。▼川柳岡山支部四月例會は佐伯鶏城氏を送る夕べとして開催。

消息

▼岩崎柳路氏(不朽洞會員)は五月初旬十年振りで松代夫人と共に歸省された。暫く滞在されることになつてゐる。五月十九日には路郎主幹の吟地調べに行を伴にされた。

新會員を募る

▼新體制下の常識として川柳を知りたい人▼趣味として川柳を創作したい人▼従来作つてはあが、よい指導者がないので一向進歩しないと思はれる人々には松坂俱樂部の廊生路郎川柳

▼杉原大研子氏(不朽洞會員)は約二十年振りで廣島縣へ歸郷された其歸途龍野驛附近で機關車の前車輪が外れ第二、第三の車輪がまさにと脱線せうとした所を危く停車し、幸ひに事無きを得たとの消息もおよるこび申上げ

▼平佐三氏(不朽洞會員)は神社といふ神社は官幣大社から中社小社は申すに及ばず、別格から國幣社に至るまで参拜され、日本全國足跡の到らないところがないといふその方面の權威であるが、南洋のパラオに唯一の官幣大社にはまだ参詣してゐられないとかで、過般出發されてゐたが四月下旬無事歸阪された

▼鈴木石鹿氏(大津)は五月五日不朽洞來訪され出島町内會の放送局見學團へ参加された

▼濱田久米雄氏(不朽洞會員)大森風來子氏(不朽洞會員)石原伯峯氏(不朽洞會員)等は五月十四日川柳岡山支部の幹事鈴木九城氏(不朽洞會員)を廣島に迎へて快談された

▼橋本路風氏(大阪)は住吉警察の裏手で旭日莊園といふアパートで總室數十餘室六疊一室が二十二圓、四疊半一室が十八

圓、瓦斯、電燈、水道の設備も完備してゐる。

▼正木水客氏(不朽洞會員)は五月二十三日、飯君を儲けられた

▼中尾鏡人氏(不朽洞會員)は四月十八日長女史子嬢を喜ばれた

▼玉井彩泡氏(不朽洞會員)は大阪市北區曾根崎上四ノ三加藤商店方へ。

▼藤井八路氏(岐阜縣)は紫朗に

▼大西洋氏(大阪)は光陽に

▼藤井桃園氏(大阪)は叫淵に

▼長谷川猿吉氏(ハワイ)は岬に

▼本庄進一路氏(松江)は快哉に

▼越智伽藍堂氏(釜山)は伽藍に

▼石原詩朗氏(松江)はまさるに

▼鈴木石鹿氏(大津)が會員大坂形水氏の紹介で不朽洞會に入會された。▼後藤田信廣氏が五月十二日入社編輯部に勤務されることとなつた。

▼古川風竹氏は「北京の兩東魚」を執筆された。東魚で思ひ出すのは北海道で川柳を作つた。東魚氏に講談社へ入社して以來、柳壇から遠ざかつてし

まつた。大正の終りか、昭和の始に東京で會つてから消息を聞かない。

▼本號からアトが編輯部で働くことになつた。

▼後藤田信廣氏が新に入社、同君も編輯部の勤務である。編輯部に新鮮な空氣を流入したので今後の編輯は期待していただけると思ふ。

▼岩崎柳路氏が久方ぶりに歸省されたので、沖繩文化の研究に出かけやうといふ相談が出来上つてゐるが、雑誌の方で一寸手が抜けず中止してしまつた。

しかし、編輯も手が揃つたので、少しすれば、沖繩に限らず、何處へでも行けると思ふ。日はまだ決定してゐないが六月には福岡まで出掛けることになつてゐる。この方面の川柳人にお會ひ出来ることを今から楽しみにしてゐる。(路郎生)

▼松坂俱樂部 川柳講座

講座へ入會されたい。講座は月二回、第一、第三日曜日午後一時から開講。(作句・添削批評講義等)會費一ヶ月金二圓。入會希望者は七階の俱樂部受付へ申込まれたい。(川柳講座幹事)

慶

轉居

改號

★社の廻覽板

▼後記
★★★地方文化といふ問題が重視されるやうになつた。そしてそれはもう論議の時代ではなく、實踐時代に移つてゐる。本誌も又その使命の重大さを痛感し、内容の刷新と充實に一段と努力を期してゐる。よりよき句、よりよき寄稿によつて編輯部に協力していただきたい。月評「川柳一ト筋」は私が差支たので度乃が出た。多少空氣が變つて面白いかも知れない。それは度乃と私と句に對する觀方が違つてゐるといふ意味ではない。出席した人達が度乃と私とはアトモスフェアが違つて來ることを指してである。

▼小知自由朗氏の「はるかなる健康」は隣組のための脚本として執筆されたもの例によつて氏獨特のユーモアが横溢してゐる。

▼抽稿の「吟行地調べ」は幾年かかるか、一寸見當がつかない。奈良篇だけでもまだ三回や四回は續くだらう。奈良篇を終つたら大和篇を書く豫定である。

▼戸田孤蓬氏の「川柳世界史」の續稿を本號から掲載することとした。これもなか／＼骨の折れる仕事だ。

▼石曾根民郎氏の「等と盟に就て」は本誌新春特別號に掲載した「迷信と川柳座談會」の記事と関連してゐるので併讀されれば一層興趣が深からうと思ふ。

▼「各地柳壇」を六號四段組に變更した。

▼福田山雨樓氏は「川柳と松岡外相」を書いた。

▼古川風竹氏は「北京の兩東魚」を執筆された。東魚で思ひ出すのは北海道で川柳を作つた。東魚氏に講談社へ入社して以來、柳壇から遠ざかつてし

まつた。大正の終りか、昭和の始に東京で會つてから消息を聞かない。

▼本號からアトが編輯部で働くことになつた。

▼後藤田信廣氏が新に入社、同君も編輯部の勤務である。編輯部に新鮮な空氣を流入したので今後の編輯は期待していただけると思ふ。

▼岩崎柳路氏が久方ぶりに歸省されたので、沖繩文化の研究に出かけやうといふ相談が出来上つてゐるが、雑誌の方で一寸手が抜けず中止してしまつた。

しかし、編輯も手が揃つたので、少しすれば、沖繩に限らず、何處へでも行けると思ふ。日はまだ決定してゐないが六月には福岡まで出掛けることになつてゐる。この方面の川柳人にお會ひ出来ることを今から楽しみにしてゐる。(路郎生)

日本ペニシラム

二大優秀品

クラウン

万年筆

大坂株式會社 井澤商店

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規 ▼用紙は原稿用紙▼文字を正確に▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先は本社宛

本社五月例会

五月三日 於 御津八幡宮
出席者(願不同)
路郎・平行・一鉢・翠芳・鮎美・豆秋
緑雨・美奈子・清月・緑風・玲之介・
夢秋・帆船・要兒・九一・かほる・籌
彦・千斗・文雄・美知夫・八樓・寄典
史・緑葉・阡淵・紫香・鷹丸・蛇蜂・
青雲・光陽・翠光・リリ・葭乃

席題「大男」 互選

見送つて淋しく歸る大男 かほる
エキストラから出世した大男 千斗
米不足天井見てる大男 要兒
大男しかし度胸の小さくて 帆船
大男そば一杯でふいと出る 美知夫
大男どう寝転んでも邪魔になり 清月
親切な影にうごいた大男 鮎美
子守する顔ニツコリと大男 桃園
席題「素足」 紫香選

懐素素足へ宿の下駄もよし
先生も素足になった汐干狩
病室を出てきた素足ははられ
素足いま砂の蛤さがし當て
口答へ素足のまんなあがりこみ
迎ひ傘素足の父と出合ふなり
席題「背中」 かほる選
たくましい兵の背中にさす夕日
行過ぎた事を背中の子が教へ
負けて来た相撲背中に砂をつけ
恥しい話背中を向けてき
キャンプ村背中がいたい愚痴に
新しい着物背中を見せ立てち
瘦せてゐる灸の背中に哀れなり
辛棒のできぬ背中にさしを入れ
流行は背中を見せた海水着
話聞く背廣の男背をまげて
席題「左手」 白柳子選
左手を國に捧げた日を思ひ
左手で夢の様な過去綴る
左手の習字慰問は見て歸り
左手で用事する娘をまたしかり
左手は子供を抱いて切符買ひ

兼題「青春」 鮎美選
青春の部屋紅バラとプロマイド
青春の涙がにじむ優勝旗
蝶を追ふやうな希望を追ふ若さ
青春を鐵の火花の中に無事
名曲にあふ青春は蘇へる
スタンドのあたり青春書きつづけ
櫻散る夜をわけもなく涙する
青春の瞳に美しきおそ櫻
青春のひととき港の灯を見つめ
僕のまゆみさんと書いてつかれる
青春の誇り海邊を唄ふて来
青春を書齋に過ぎ背が淋し
青春を緑の中にとけこませ
青春の今夜も風呂へ行きそびれ
青春が血迷ふてゐるバーの隅
青春を知りそめた娘が振り返り
青春の龍宮城に似る夜かな
兼題「ゴーストツブ」 路郎選

兼題「青春」 鮎美選
青春の部屋紅バラとプロマイド
青春の涙がにじむ優勝旗
蝶を追ふやうな希望を追ふ若さ
青春を鐵の火花の中に無事
名曲にあふ青春は蘇へる
スタンドのあたり青春書きつづけ
櫻散る夜をわけもなく涙する
青春の瞳に美しきおそ櫻
青春のひととき港の灯を見つめ
僕のまゆみさんと書いてつかれる
青春の誇り海邊を唄ふて来
青春を書齋に過ぎ背が淋し
青春を緑の中にとけこませ
青春の今夜も風呂へ行きそびれ
青春が血迷ふてゐるバーの隅
青春を知りそめた娘が振り返り
青春の龍宮城に似る夜かな
兼題「ゴーストツブ」 路郎選

兼題「青春」 鮎美選
青春の部屋紅バラとプロマイド
青春の涙がにじむ優勝旗
蝶を追ふやうな希望を追ふ若さ
青春を鐵の火花の中に無事
名曲にあふ青春は蘇へる
スタンドのあたり青春書きつづけ
櫻散る夜をわけもなく涙する
青春の瞳に美しきおそ櫻
青春のひととき港の灯を見つめ
僕のまゆみさんと書いてつかれる
青春の誇り海邊を唄ふて来
青春を書齋に過ぎ背が淋し
青春を緑の中にとけこませ
青春の今夜も風呂へ行きそびれ
青春が血迷ふてゐるバーの隅
青春を知りそめた娘が振り返り
青春の龍宮城に似る夜かな
兼題「ゴーストツブ」 路郎選

兼題「青春」 鮎美選
青春の部屋紅バラとプロマイド
青春の涙がにじむ優勝旗
蝶を追ふやうな希望を追ふ若さ
青春を鐵の火花の中に無事
名曲にあふ青春は蘇へる
スタンドのあたり青春書きつづけ
櫻散る夜をわけもなく涙する
青春の瞳に美しきおそ櫻
青春のひととき港の灯を見つめ
僕のまゆみさんと書いてつかれる
青春の誇り海邊を唄ふて来
青春を書齋に過ぎ背が淋し
青春を緑の中にとけこませ
青春の今夜も風呂へ行きそびれ
青春が血迷ふてゐるバーの隅
青春を知りそめた娘が振り返り
青春の龍宮城に似る夜かな
兼題「ゴーストツブ」 路郎選

兼題「青春」 鮎美選
青春の部屋紅バラとプロマイド
青春の涙がにじむ優勝旗
蝶を追ふやうな希望を追ふ若さ
青春を鐵の火花の中に無事
名曲にあふ青春は蘇へる
スタンドのあたり青春書きつづけ
櫻散る夜をわけもなく涙する
青春の瞳に美しきおそ櫻
青春のひととき港の灯を見つめ
僕のまゆみさんと書いてつかれる
青春の誇り海邊を唄ふて来
青春を書齋に過ぎ背が淋し
青春を緑の中にとけこませ
青春の今夜も風呂へ行きそびれ
青春が血迷ふてゐるバーの隅
青春を知りそめた娘が振り返り
青春の龍宮城に似る夜かな
兼題「ゴーストツブ」 路郎選

渡し船ドスンと着いて仕舞ひなり 光路
渡し船長い筏に待たされる あつし

川 竹原支部句會 (廣島縣)

三月三十日 於芳泉居 梶川芳郎報
軍事便〇〇〇の多いこと 芳泉
平社員秘密會議へ遠くある みづほ
國民服お召ある日を待つてゐる 同
國策の國民服がよく似合ひ 紫蓮
光榮の御沙汰へ遺族派する 芳泉
隣組唄の通りにゆかぬなり 愛鳩
階級も肩書もなし隣組 芳泉
出戻りの昔の姉と違ふ姉 同
姉さんをさしおいて嫁ぐよい器量 芳泉
小姑の呼ぶ義姉さんにトゲがあり 同
絶望へやさしい鞭をあてくれ 斗秀

川 四ツ橋支部句會 (大阪)

四月十三日 中内翠芳報
お茶碗を並べて子供呼びに出る 双葉
節米にしては大きい茶碗なり 同
十人前揃ふ茶碗を大事がり 富士
愛嬌は商人と云ふ手をもみて 秀甫
愛嬌が程度を越して見すかされ 夢想
日曜は家庭奉仕の日ときまり 翠溪
食糧増産土に親しむ日曜日 美奈子
日曜が祭日となり口惜しがり 徳磨
獨身者雨の日曜もてあまし 防風
時局柄日曜だとて奢られず 輝翠
傷兵のバスが續いていたし 山人
傷兵の氣持ち職友のみが知る 翠芳
有難うと傷兵はつきり云つて呉れ 巨人
傷兵に煙草をつける手が多し 八九滿
傷兵は一人ばつちで坐るなり 綠雨

川 尼崎支部句會 (尼崎)

二月十一日 於快光莊 酒井美知夫報
店先のスッさわられただけの事 寄與史
店先へ来て金入れを思ひ出し 寄與史
店先へ氣易く巡査話しかけ 古詩郎
店先でされる意見は知れたもの 綠水
店先の勤務員はよくしやべり 寄與史
店先に座る番頭の白髪を見 鮎美
ないと云ふ錢がオーベで音を立て 同
オーベを着た嬉しさへ雪となり 古詩郎
合オーベ五月の風が脱げと云ふ 美知夫
立讀は安い雑誌を買つて出る 路郎
立讀をビツクリさせた急カーヴ 正路
立讀のあつかましさは折つておき 路郎
立讀へ本屋の主人眼鏡越し 正路
殊動甲馬の力を七分いふ 路郎
稽古中によく落された馬と行く 同
女事務辭職と云へばおめでたう 和郎
女事務帳簿を立てゝ笑ふてゐる 美知夫
しるこ屋で待ち合せてゐる女事務 綠雨
女事務家ではママと呼ばれてゐる 八櫻
女事務男のつれもあると云ふ 同
青春を日記に秘めて女事務 正路
女三十にして會社での古參株 古詩郎
起重機へ馬語めた脚となり 美知夫
馬を打つ鞭紙幣束の音がする 古詩郎
征く馬に人參一〇で別れる 正路
満月に馬の背中の米俵 鮎美
坊つちやんと知つてか馬は落さぬ 路郎
三月十五日
貸主がもう知つてゐる持參金 美知夫
持參金嫁は冷たい目でみられ 寄與史
春雨へ未だ體温が下らない 同

川 堺支部句會 (堺)

四月十八日 於角堂居 村上角堂報
歐洲の地圖一色に塗る獨逸軍 露舍
獨逸軍は強ひなアと桂馬飛び 角堂
稻妻の早業を知る獨逸軍 角堂
日本を襲めて獨逸軍勝ち續け 波夢造
面白い地圖に出させる獨逸軍 波夢造
地圖の色塗りかへて居る獨逸軍 喜堂
獨逸軍に鍛冶屋の子供手を引かれ 喜堂
英國のニュース獨逸軍勝つて居る 喜堂
獨逸軍兄弟分の名に恥ず 波夢造
彈丸くぐる強さもあつて鳩の聲 波夢造
空翔る鳩は機密を胸に持ち 角堂
太平洋飛ぶ日を鳩は待つて居る 角堂
鳩の班野砲の音に勇み立ち 豆秋
賽錢を替へる所と鳩は知り 露舍
踏みそをな鳩追ひ乍ら道をあけ 喜堂
傳令鳩まだ還り来ぬしけとなり 喜堂
初午の暮に風ありビルディング 豆秋
初午に太鼓叩かず笛吹かず 露舍
初午に社員總出と云ふ會社 露舍
俄鬼大將初午の擲擲けて来る 露舍
初午に去年も四ツ辻で逢ふた人 角堂
初午のろうそく二本忘れられ 角堂
かほる

川 日和佐支部句會 (徳島縣)

五月十日 濱田賢次報
露で書く一萬圓の筆太し 蝶人
爆彈を落したやうな墨の跡 天秀
一級が胸が墨汁すいあける 龜水
早慶戦見て来たやうな口をきく 三叉路
ラヂオから拍手がやまぬホームラン 逸茂
満塁へ觀衆みんな落ちつかず 須惠夫
夜櫻を「勝つてくるぞ」で引上げる 秀湖
酒なくばなくて花見の出来る時 みのる
飲みたらしぬ押へて花を賞め 十四之
元祿の花見時代が羨まれ 梅春
花便りポスターの色も自肅めき 初舟
時變下へ酒も假裝もない花見 一千子
戰陣の夢に故國の花を見る 光明
五時から酒も出します花見茶屋 同
莫産打ちで此處が柳河町と知る 藤樓
名物は水鏡らしき鱸鍋 初舟
そのかみのお城を徳兵衛の数 路村
水郷とよくもつけたる橋ばかり 平人
歩くとこ花の人なり城下街 一秋
水郷の情緒を綴る詩の数 一葉
早鐘のみんなの無事を祈願する 未俊
聖戦へ勝たねばならぬ祈願する 抱逸
五月十日
露で書く一萬圓の筆太し 蝶人
爆彈を落したやうな墨の跡 天秀
一級が胸が墨汁すいあける 龜水
早慶戦見て来たやうな口をきく 三叉路
ラヂオから拍手がやまぬホームラン 逸茂
満塁へ觀衆みんな落ちつかず 須惠夫

川 早鐘支部句會 (大牟田)

四月六日 於早鐘講堂 高田抱逸報
慰問文米の配給までもかき 秀夫
日本晴銀の翼に振りかへり 進一

36

ガラス壺代用

紙容器

金屬代用紙罐

紙コップ

丸形・角形・小判形・

組立式各種・藥品・食

料品・菓子等の容器と

して最適



大阪市住吉區曙通一丁目四〇番地

二葉屋商店

電話事務所用 我 天下茶屋 四一〇四番 四三〇二番

菊正宗



店商納嘉本 會社 株式

天 下 の 靈 場

高 野 山

... 片 往 道 復 二 時 間 三 圓 八 十 四 錢 ...

南 海 電 車

SENRYU ZASSHI

Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

にきびと 美顔水



蚤・蚊・南京虫等の
毒虫でカユい時!

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、
殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重
寶がられてゐます。

▼ニキビ吹出物に非常によく効くので
大評判の薬です。ニキビや吹出物でお
困りの方に大きな喜びの糧
お勸したい薬です!

▲定價一瓶四十五錢・六十五錢・一圓三十錢。全國藥店にあり

是	吹	ニ
非	出	キ
此	物	ビ
藥	に	.

阪大・京東

館天順谷桃